条件付きの結婚生活

八月葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
条件付きの結婚生活

【Ｎコード】
Ｎ７７９５Ｗ

【作者名】
八月葉月

【あらすじ】
管家の娘、褒？は変人として有名だった。高官の父を持つも主だった宴に顔を見せることはなく、ただただ変人と称される噂が流れるばかり。そんな彼女に突然、縁談の話が舞い込んできた！　しかも、なんとお相手はこの国の皇帝？！　誰もが羨む相手からの縁談話に、褒？は全く乗り気ではない――どころかすっぱりお断りしたかった。しかし、彼女の抵抗も虚しく両親に説得され、やむなく了承するハメに…。けれど、ただで納得するのは癪に障る。そこで褒？は結婚の了承に際し、とんでもない条件をつけた！　しかも、ど

うやら彼女にはまだまだ秘密があるようで…？　ドキ！　ラブ？
中華ファンタジーが今ここに開かれる！

降ってきた縁談

何故、こんなことになっているのだろう――？

壮麗な儀式が粛々と進み、大宗伯（だいそうはく）の朗々たる声が神殿内に響く中、当事者であるはずの管褒（かんほうじ）?は遠くこの状況の始まりを思い出していた。

＊＊＊

ことの始まりは十日程前――

日が暮れ、夕餉の時刻になった管家の邸の広い居間からは楽しげな声が漏れていた。

その日、珍しく早く帰ってきた父を交えて、褒?は家族三人での夕餉を楽しんでいた。

久々の家族揃っての食事に満腹感と幸福感に満たされていた褒?は、両手で茶器を抱え、嬉しそうに食後のお茶を飲んでいる。

そんな褒?に突然、父が爆弾を落とした。

「褒?、嫁ぎ先が決まったよ」

突然放たれた爆弾に褒?は目を丸くする。

「誰のですか?」

誰のことを指しているのかは分かっていたが、すっとぼけて取り敢えず交わしてみる。
だが、甘くない父をそれくらいで交わせるはずもなかった。

「褒？のだよ」
「父様……、正気ですか？」

あっさり突きつけられた答えに本気で父の正気を疑ってしまう。そんな娘の態度に全く怯むことなく、父はにこにこと笑って断言してくれた。

「正気で本気だよ」

その顔を見て悟る。

（本当に本気で言ってる……！）

彼女は父の本気に思わず眉を顰める。同時にどうすればこの話を断れるかを懸命に考えた。
だがすぐに名案など浮かぶはずもなく、今度は冗談に出来ないかと考え出す。
そんな、乗り気ではない――というか嫌そうな褒？の様子に父の顔が悲しそうに歪んだ。

「嫌、なのかい？」
「うっ……」

それはそれは悲しそうな顔で言われると、即答で頷けず、答えに詰まってしまう。
しかも性質（たち）の悪いことに父は本気で悲しんでいるのだ。そんな父を

切り捨てるだけの冷酷さも強さも持っていない褒？は、断腸の思いで話を進める。

「……お相手の方によります」

その言葉に精一杯の想いと抵抗が詰まっていた。しかし、褒？が話を進めたことに気を良くした父は、娘の小さな抵抗などものともせずににっこりと笑った。

「それなら大丈夫だよ。お相手は李辟方（りへきほう）様だから」

「李……？　皇帝陛下ですか？！」

「ああ」

李姓は代々この国の国主の血筋が名乗る姓だ。つまり、李辟方――それはこの茜国（せんこく）の皇帝の名だった。

予想すらしていなかった名前が出て褒？はぎょっとする。彼女は否定して欲しくて、身を乗り出して反射的に確認するが、それもあっさりと肯定されてさぁっと青褪めた。

諦めて結婚出来るような相手ではない。というか、王の妻なんてそんな重責背負いたくない。

褒？は形振り構わず叫んでいた。

「無理です！」

「どうしてだい？」

不思議そうに聞き返す父が腹立たしい。

（分かってるくせに……！！）

それでも父を責めることなど出来るはずもなく、けれど受け入れる

ことも出来なくて、恨めしそうに父を睨んでしまう。
娘のその表情に、流石に気が咎めた父は困ったように笑った。

「だって貴族は嫌なんだろう？」
「……貴族は嫌いです」
「それなら王族ならいいだろう？　王族は貴族じゃない」
「っ！　それは屁理屈です！！」

今度は切り捨てた娘に、父は益々困り顔で笑う。本当に困り果てている父の姿を見ていると、じわじわと罪悪感が湧き上がってくる。けれど今度ばかりは折れるわけにはいかない。自分が折れればすぐさまに皇帝との結婚が決まってしまうのだ。
ぐっと歯を食いしばり揺れそうになる心を奮い立たせる。
膠着状態になってしまった二人をみかねて、今まで様子を見守るだけだった母が口を開いた。

「后になれば責任を負うことになるわ。だから貴女が軽々しく頷けないのも当然ね」
「母様……！」

母の言葉に褒？はぱぁっと瞳を輝かせる。だが――

「けれど、お父様の話もきちんと聞いてあげて？」

美しい顔で穏やかに微笑んでそう付け加えた母に泣きたくなる。

（そうだった……。結婚してからもう２０年以上経つのに、未だにラブラブなんだった……）

公然といちゃいちゃベタベタする両親だ。父が一番な母が、父の敵

になるはずがなかった。
一度持った希望を跡形もなく砕かれたせいで、思いのほかショックが大きくがっくりと項垂れてしまう。相変わらず母は強い。娘でも容赦なかった。
打ちひしがれ、居間の卓に突っ伏す褒?を哀れに思ったのか、彼女の頭を父が優しく撫でる。

「褒?だから大丈夫だと思ったんだよ?」

見事な飴と鞭だ。
思わずほだされそうになってしまう。

それでも褒?は頷けなかった。

両親が自分を愛してくれていることも、大切に想ってくれていることも知っている。
自分の身と将来を案じて縁談を持ってきてくれていることも。
今までに来た縁談の話も、両親が吟味を重ねて良縁を選んでくれていた。それでも頑なに拒み続けたのは自分だ。両親はその理由を知っているからこそ、強く薦めては来なかった。
だから褒?は両親の優しさに甘えていたのだ。いつまでもそのままではいられないと分かっていながら、問題を先送りにしてきた。そのツケがいよいよ回ってきたらしい。

簡単には断れない事情があることを察した褒?は、顔を上げると両親を見つめた。

「事情を話して」

そんな娘の姿に二人は頬を緩める。両親が隠している事情を慮って

譲歩した娘が誇らしくて愛しい。

「陛下には后も妃もいない。王に子供がいないというのは国の大事だ。今の状態のまま王が亡くなられてしまえば次の王位を巡って内乱が起きてしまう」

「……」

ここまではいいか？　と視線で聞いてくる父に無言で頷く。それから黙って先を促すと父は真剣な顔をして更に続けた。

「だがそれよりも深刻なのは、空席の后の座を争って陰で動いている者たちだ。いつまでも席が埋まらないために、その争いが熾烈化している。このままでは下手をすると内乱に発展しかねない」

「そんなに？」

「残念なことにね。そして、そんな所を他国に突かれたらこの国が危ない」

「……」

「５０年前の大戦以来、この国は決して豊かとは言えない。その上、近年は不作続きで民も飢えている。今は国を富ませることを優先しなければならない。そんな時に内乱など起こすわけにはいかないんだ」

そこまで深刻な事態に陥っているとは思っていなかった褒？は驚いてしまった。何も知らなかった自分に腹が立って、膝の上で拳を握る。

そんな娘の姿に微笑みながら、母が付け足した。

「それに王宮ならば貴女も安全に暮らせるわ。王宮の守りは鉄壁だもの」

「ああ。王宮に渦巻いている、人の悪意や害意ならどうとでも対処

出来るからな」

まるで簡単なことのようにあっさりと言い切る父はどうかと思う。
褒？としては頼もしい限りだが……。
しかし、国家の危機よりも後に付け足された二人の言葉の方が困った。
そんなことを言われたら、もう、断れない。

（ズルイなぁ、もう……）

心の中でそう拗ねてみる。というか、もう拗ねるしかない。
俯いてそんなことを思っていると、クスクスと笑う声が聞こえて視線を上げた。
すると、両親が揃って褒？を見て笑っている。
どうやら心の中だけで拗ねていたはずなのに、顔にも出ていたらしい。用心して俯いていたのに全く意味がなかったようだ。
そのことに更に拗ねたくなった褒？はあることを思いついた。このまますんなり承諾するのも癪だし、これでこの話が流れるのならばそれはそれで都合がいい。それにこれは以前にも話したことがあるし、常日頃から気にしていることでもあるからまぁいいかと簡単に決めると、両親を見つめてからにっこりと微笑んだ。

「分かりました。そのお話、御受け致します。……ただし、条件があります」

降ってきた縁談（後書き）

どうも。初投稿です。
いちゃいちゃする二人が書きたくて作りました。

ついでに好きなもの詰め込みまくったので、脱線しやすいです（苦笑）

試行錯誤しながら頑張りますので、どうぞ宜しくお願いします。

婚姻の儀

（私が甘かったわ……まさか皇帝があんな条件を飲むなんて……）

褒（ほうじ）？は自分で条件を突きつけておきながらそのことは棚に上げて、条件をあっさりと飲んだ横の男と心の距離を取る。今は残念ながら身体は離れられないが……。

何故なら、今、王宮内にあるこの誓言の間では褒？と横の男――基（もとい）今上帝李辟方（りへきほう）との婚姻の儀が執り行われていた。

『誓言の間』というのは、国家に関わる儀礼や祭祀を執り行う場で古くからこの王宮に存在している。その室内は豪華というよりは流麗だった。目にも鮮やかな朱色の柱が等間隔に並び、壁には純白の布が幾重にも垂れ下がっている。天井窓から降り注ぐ陽光をその布が反射して、室内に神秘的な雰囲気を醸し出していた。そこに正装の高官と春官がずらりと並ぶ様は壮観であった。

更に室の奥、床が少し高くなっている壇上の奥の壁にはこの国の国章が刻まれ、その前に設えられた式儀棚には、国の神器である銅鏡と銅剣、銅器が置かれ、銅器の中には灰が詰まっており、そこには儀礼で使用する式儀香が刺さってゆらゆらと煙を上げていた。

その式儀棚の前には礼法や祭祀を司る春官の長である大宗伯（だいそうはく）が立ち、朗々とした声を室内に響かせながら婚姻の宣誓を宣（の）っている。

だが、壮麗な儀式の中、壇上に上がる階（きざはし）の下で皇帝と並びながらその声を聞く褒？には、難しい宣誓の祝詞の言葉も意味も理解出来ないため、退屈しきっていた。

そこでことの始まりに思いを馳せていた訳だが、思い出していたらその時の不満をも思い出してしまい段々と考えが愚痴っぽくなってくる。

（それにしても、なんで皇帝の婚姻の儀がこんなに早い訳？　公布（ふれ）が出てからまだ十日しか経っていないのに……本当に最悪……）

褒？は周囲には気付かれぬように小さくため息を付くと、すぐに思考を切り替える。不満を挙げても現状が変わるわけではないのだから、それは不毛な行為だ。そう割り切ってすぐに考えるのを止めると、今度は暢気なことを考え始めていた。

（大宗伯の爺爺（じいちゃん）、良い声してるなぁ……渋くて痺れる）

というのも、そうでもしないと気がまぎれないからだ。褒？としては、儀式のためにと過度なほど飾り付けられた衣装や飾りが鬱陶しくて仕方なかった。

皇后の嘉礼服である？衣（てきい）は丈が長く、袖口も広く布をふんだんに使った代物で、鮮やかな朱色の絹地に金糸などによって描かれた鳳凰の刺繍が優美に舞っていた。また、彼女がまとっている黒く細長い領巾（ひれ）も、黒の絹地に金糸等によって李花（すもものはな）などが刺繍されている。こんな見ただけで高価な品だと分かる上に、肌触りも良くて傷付けたり汚したりしないかと気を遣ってしまう衣装は嬉しくない。逆に疲れる。

その上、髪の毛はどこがどうなっているのかも分からない程複雑に編みこまれ、櫛やら簪やら真珠やらをふんだんに飾り付けられていて、重くて痛かった。

流石の自分でも婚礼衣装にはうきうきとはしゃいでしまうかと思っていたのだが、そんなことは全くなかった。それ所か今すぐ脱ぎた

いぐらいだった。

褒?はちらりと横に立つ皇帝を盗み見る。

此方も嘉礼服である冕服(べんふく)を着てしっかりめかしこんでいた。丈が長く、袖口も広く布をふんだんに使った代物で、ただし彼女の衣装とは違い此方は鮮やかな朱色の絹地に刺繍は一切ない。交領には黒の絹地に李花などが刺繍されていて、下裳には荘厳な龍が描かれ、見事に映えている。更に髪をきっちりと結い上げられ、黒い冕冠(べんかん)を被っていた。

見ているだけで肩が凝りそうな衣装だ。だが、皇帝は全く顔色も表情も変えることなく大宗伯の祝詞を聞いている。

褒?は「こんな格好をしていてよく平気な顔をしていられるな」と思わず感心してしまった。

ついでとばかりに夫となる男をじーっと観察してみる。だが、視線を感じたのか皇帝が横目で此方を見た拍子に彼とばっちり目が合ってしまった。

その視線に値踏みするような意図を感じた褒?は反射的に横目で彼を睨みつける。すると、皇帝は意外そうに目を見開いた後、愉快そうに口端を吊り上げた。

その反応(えみ)は馬鹿にされているようでものすごく腹が立った。怒りの情動のままに彼に掴みかかろうと思ったが、タイミングよく大宗伯が二人に声を掛けてきた。

「お二方、どうぞ前へ」

その言葉ではっと我に返った褒?は、怒りを飲み込んで前を向くと皇帝と足並みを揃えて階を上った。壇上に上がってから三歩進んで

ピタッと立ち止まる。

「では、誓言を」

目の前にいた大宗伯が静かに下がり、褒?たちは再び揃って歩く。今度は式儀棚の前で足を止めると、片膝を付いて両手を合わせ、拱手の型をとり、頭を垂れて礼をする。その後、頭を上げ、体(たい)の中心で三度拍手(かしわで)を打ち、誓言する。

「古くより此の地を護りし英霊よ。我が一族に新たな血が加わることを御報告申し上げる。此れより先は新たな血と共に国のために尽力し、民に繁栄をもたらすことを、そして、対となる新たな血を愛し護りゆくことを茜国国主李辟方が誓う」

堂々とした声で皇帝が告げた。それを聞き終えてから、一度深呼吸をして褒?も声を上げる。

「古くより此の地を護りし英霊よ。彼の一族に新たに加わることを御報告申し上げる。此れより先は一族の一員として共に国のために尽力し、民に安らぎをもたらすことを、そして、対となる一族を愛し支えていくことを管家一姫管褒?が誓う」

声が震えなかったことに満足しつつ、再び頭を垂れる。それから立ち上がって振り向くと、褒?は横から差し出された手に自分の手を重ねた。そのまま壇上の終わりまで戻ると、それに合わせて二人の後ろに立った大宗伯が声を張り上げる。

「ここに誓約は成された。国を代表して言祝(ことほ)ぎ申し上げます」

「おめでとう御座います」

後半を二人に向かって優しく告げた大宗伯の言葉に続き、誓言の間に集った立礼した官吏たちからも祝いの言葉が合唱された。
それに褒?と皇帝は軽く頷くことで応える。

「これにて誓約の儀は無事終えられた」

「朱の国旗と祝音を上げろ。これより三日続く『朱の祝祭』の始まりだ！」

大宗伯の言葉によって誓約の儀は締めくくられ、続く皇帝の言葉で国を挙げての宴が始まった。

初夜（1）

誓約の儀が終わり、その後の宴で国内の貴族や有力者、官吏への挨拶も済ませた褒（ほうじ）？は、案内された室（へや）の寝台ですっかりのびていた。

それもそのはず、誓約の儀とお披露目の宴で普段は遣わない様な気を遣いまくり、作り笑いをし過ぎた結果、心身共に疲れていた。その上、自分の室に案内されるや否や侍女たちに服を引（ひ）ん剥かれ、何故かついてこようとする侍女を追い返しつつ湯浴みをし、肌を磨くためとマッサージをされた。

その後、すーすーして薄くて脱がしやすい夜着である、丈が長く裾の広がったゆったりした緋（あか）い深衣を衽（おくみ）で留められ、そこでようやっと侍女たちが退室して解放されたのだ。

どうやら総てはこれから行われる儀式の準備だったらしい。

茜国（せんこく）は建国からまもなく５００年経つ伝統ある国だ。そのため、古くからの因習や伝統が所々に残っている。特に儀礼や祭祀ではその傾向が顕著に現れている。

皇帝の婚姻もその例に漏れず、先ほどの『誓約の儀』や花嫁の室に花婿が三連夜通う『華連夜』など一言に『婚姻の儀』と言っても内容は様々だ。

その儀式のひとつである『華連夜』がこれから此処で行われるのだ。こう書くと神聖な儀式のようだが、ぶっちゃけた話ただの初夜のことで、花婿と花嫁の性行為だ。

「……あー」

そのことを考えると気が重い。

褒？は顔の上で腕を交差させて視界を覆った。
両親の想いに絆（ほだ）されたとはいえ、覚悟を決めて嫁いで来た。当然そういった行為も含めて。

だがしかし。

「私は誰かと口付けたこともないんだぞ？　いきなり性交って難題過ぎだろう！」

かなり恥ずかしい告白を大声で叫んでいた。

「随分面白い出迎え方だな？」

「！」

褒？は声が聞こえた方向に反射的に近くにあった物を投げ付ける。
それから、ゆっくりと身を起こすと室の入り口を見据えた。

「危ない嫁だな……殺す気か？」

いつの間にかそこに立っていたのは夫となった皇帝李辟方（りへきほう）だった。
彼は、褒？が投げた千本（せんぼん）と呼ばれる細長い針を右手に持って、にやにやと笑いながら寝台に近づいてくる。

先ほどの告白を聞かれたことに羞恥を覚えるも、この男の態度に腹が立っていた褒？は自分の赤くなった顔など見られたくなかった。
冷めた表情で彼を睨みながら、表情が変わらないように気合いで顔に集まりそうになる血を散らす。成功していたかどうかは分からないが。

「千本で死ぬ訳ないでしょう？　そんなことも分からないんですか

？」

「……。まぁ、心配するな。仕方なくとはいえ娶った責任は取る。じっくり可愛がってやろう」

可愛くない返答に一瞬寄った眉をすぐに戻すと、辟方は不敵に笑いながら寝台の上に膝をつく。そのまま右手で身体を押された褒？は抗うことなく、ぽすんっと寝台に押し倒された。

雑な扱いに思わず睨むと面白がるように笑われる。そのことに更に腹が立つのだが、人の上に乗って悪趣味にも笑っているのは仮にも自分の夫であり、この国の皇帝だ。

我慢我慢と自分に言い聞かせて殴りそうになる衝動をなんとか抑える。

だが、そんな褒？の努力を嘲笑うように笑いながら、今度は顔を近づけて口付けようとしてくる辟方の瞳が観察するように冷めているの気付く。

どうやら褒？は試されているらしい。

「……あぁ、もう駄目。無理。絶対、無理！！」

我慢の限界だった。

悉く人の神経を逆撫でしてくる態度に怒りを抑えきれず、その衝動のままに褒？は拳を繰り出した。

辟方は突如顔に迫ってきた拳にぎょっとして、慌てて仰け反り、なんとかその拳をかわしたが、その拍子に体勢を崩してしまう。その隙に褒？は下敷きにされていた足を抜き、その足を延ばして辟方の腹に叩き込む。それを避けることの出来なかった辟方は、打ち込まれた衝撃で寝台から転げ落ち、床に尻餅を付いた。

それを見て溜飲を下げた褒？はふんっと一息つくと、寝台に背筋を伸ばして座り、辟方を見下ろす。

「どうやら私達には話し合いが必要かと存じます」
「あ？」
畏まって言った褒？を胡乱な目で見上げながら、辟方は顔を顰めて腹を摩（さす）っていた。
そんな彼の様子を無感情に見つめながら褒？は続ける。
「このままでは危害を加えそうなので」
「もう加えてるだろうが……」
呆れたように付け加えた辟方に悪びれることなく褒？は開き直った。
「きちんと手加減しました」
「そういう問題じゃない」
「自業自得です」
「は？」
褒？の思わぬ切り返しに、辟方は訳が分からず思いきり顔を顰める。
そんな辟方を睨みながら褒？はまた少し腹が立ったように口早に答えた。
「挑発して試したでしょう？」
その問いにああ、と辟方は納得した。それと同時に少し意外そうに褒？を見る。
「気付いてたのか」
「ええ。それに腹が立ったので、つい」
「つい、で殴って蹴るのか？　お前は……」

「正当防衛です」
「過剰防衛だ」
「あのくらい避けると思ったので」
「……」

呆れて返した言葉にすかさず答えを被せてくる褒?に、辟方は片頬を引き攣らせた。
そして、横を向いて嫌そうな顔をした彼はぼそりと小声で呟く。

「父親にそっくりだな……」
「?」

その言葉が聞こえなかった褒?は、不思議そうな顔をして辟方を見ている。
それに一つため息をついて気分を入れ替えると、彼はよっと立ち上がって褒?とは少し距離をあけて寝台に腰掛けた。

初夜（1）（後書き）

思ったより長くなったので分割しました。
なので今回はちょっと短めです。

ようやくメイン二人がまともに対面しました。
まだまだ導入部なのでこの辺はなるべく早く更新したいです。
頑張ります～

初夜（2）

「取り敢えず、その話し方は止めろ」
「？」
突然言われた言葉の意味が分からず褒（ほうじ）？は首を傾げる。辟方（へきほう）はそんな彼女に少し苛立ったように付け加えた。
「普段の話し方にしろと言ってるんだ」
「何故です？」
「お前にそういう話し方をされるのは馬鹿にされている気がして気分が悪い」
子供のように拗ねたように言う辟方に、褒？は呆れてしまう。けれど、その姿は先ほどの宴で見せていた王としての顔とは違い、年相応に見えて何だかおかしかった。
「被害妄想」
「うるさい！　公（おおやけ）の場でだけ気を付ければいい。後は普段通りに話せ」
その申し出は褒？にとってもありがたかった。
元々堅苦しいのは好きではない。両親も普段は砕けた話し方をしていたので、きちんとした言葉遣いは客が来た時と食事の時だけしか使ってこなかった。だが、流石に後宮に入ってまでそういう訳にはいかないだろう。覚悟をしていたとは言え、これから四六時中言葉に気を付けなければならないのかと、かなりうんざりしていたのだ。なので、辟方の提案に是も非もなく賛成した褒？は彼の気が変わら

ない内にと早速肩の力を抜く。

「堅苦しいのは好きじゃないからいいけど……こんなんだよ？　いいの？」

「構わん。その方が違和感がないしな」

「へー」

別に彼の印象などどうでもよかった褒？は気のない返事をする。
そのあまりにも気の抜けた褒？の返事に、辟方は思いきり呆れた。
仮にも目の前にいるのはこの国の皇帝であるのにも関わらず、気を抜き過ぎだろう。先ほどまでと落差があり過ぎだ。
あまりにも豪胆な彼女の態度に、こちらの気もすっかり抜けてしまう。

「……躊躇いがないな」

「問題が？」

自分で言い出しておいて何か文句でもあるのか？　と褒？が睨みつけた。そんな彼女のふてぶてしい表情に辟方はおかしくなってくる。
権力を笠にきて闇雲に他者を抑え付ける気はないが、現在自分が最高権力者であることに変わりはない。その自分にこんな態度を取れる姫がいるとは思わなかった。
そのことがおかしくて、何故だか少し嬉しい。

「ない！　……こんな娘だったのか」

褒？は突然くつくつと笑い出した辟方を不審な目で見た。

「……今更後悔してるわけ？」

「してない。憂鬱なだけだ」

憂鬱だ、と言いながら笑っている辟方が不気味でよく分からない。しかし、ここで困惑して相手に主導権を握られてしまうのは褒？の本意ではないので、なんとか文句を言い返した。

「本人を目の前にしてよくもそんなこと言えるわね？」

「お前も俺のことなぞ気にしてないからな。俺だけ気にするのも馬鹿らしいだろ」

「ああ、そうだね」

「……」

あっさりと肯定されて辟方は一瞬言葉を失う。

（肯定するのかよ……）

それから苦笑したようにまた笑った辟方は、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべる褒？に気付き、息が止まった。幼く見えるその笑みは、この後宮ではほとんど見られないような純粋さで、辟方の記憶にしっかりと焼きついたのだった。

褒？はそんな彼の様子に首を傾げながら、しかし一瞬でその笑みを消すと先ほどまでの無表情に戻ってしまう。

「ついでに言うなら、条件を守らない君が悪い」

「あ？　条件？」

ぼーっとしていた辟方は何を言われたか理解出来ずに困惑した。それに褒？は呆れたように付け加える。

「婚姻を承諾するにあたって条件をつけたでしょう？」

「ああ。忘れてた」
全く悪びれずに開き直り、しかも今思い出したらしい辟方に、流石の褒？も目を丸くする。
「は？」
「いや、あれはこちらに断らせるためのものだと思っていた」
何故だか先ほどまでとは違い、穏やかな目をして話す辟方に、褒？は戸惑いつつも本心を漏らした。
「まぁ、そういう意図があったことも否定しないけど」
「けど？」
「本気」
「そうか」
辟方はあっさりと頷いて納得した。
だが、あっさりと納得されるとは思ってみなかった褒？は訳が分からず困惑する。
「それでいいわけ？」
「別にあの条件が付こうと問題ない」
何だか辟方に主導権を握られている気がする。それは面白くない。
そう思った褒？は、主導権を握るべく、取り敢えず怒らせようと挑発してみることにした。
わざと蔑むような目で辟方を見つめながら、少しだけ彼から距離を取る。

「はーん。変態だったんだ」
「は？　何でそうなる？！」
褒？の思惑通りに喰いついて来た辟方に、にんまりと意地の悪い笑みを浮かべた。
「いや、だって“目隠し行為（プレイ）”が好きなんでしょ？」
「違う！　大体お前が付けた条件だろう！　“性行為を行う際には目隠しをして行うこと”って！」
誤解を解こうと慌てて言い募る辟方の焦りように、褒？は段々と楽しくなってくる。
「そこが気に入って婚姻に乗り気になったと父様に聞いたけど？」
「面白いとは言った。だがな、それは、そんなことを堂々と条件として突きつけてくる姫がいることが面白かったんだ。断じてそういう行為が好きなわけではない！」
「へー」
「お前！　信じてないだろう！」
褒？は横を向いて適当に返事をした。そのおざなりな態度に、一向に誤解が解けない焦りが昂（こう）じた辟方は、身を乗り出し、彼女の肩を掴む。そして、無理矢理自分の方に彼女の体（たい）を向けると低く重い声で一言告げた。
「聞け」

初夜（2）（後書き）

すみません。まだまだ続きます。

なんだか人が話し出すと簡単に暴走してくれるので困ってます。
暴走して、戻って、書き直してを繰り返して現在ぐるぐる回っています。
お陰で最初の予定と少しずつズレてきました。
まだ４話目なのに……ｏｒｚ

あ、性行為という言葉が出ましたが直接的な表現はしていないからいいか、ということでＲ１５指定していません。
それは問題でしょ？！　とか、不愉快です！　と思った方がいたら一報いただけると嬉しいです。
私は少しズレているらしいので常識の基準がいまいち分かっていません。
皆様が頼りです。

ホントお願いします。

初夜（3）

「あー」

その声音に、洒落にならない冷たさを感じて褒(ほうじ)?は頬を掻いた。どうやらやり過ぎてしまったらしい。

半眼でこちらを睨んでいる辟方(へきほう)に、ははは と乾いた笑みを向けながら、どうしよう、と内心焦る。

取り敢えず謝っておくか、と安易に結論を出すと、辟方の顔色を上目で窺いながら可愛い子ぶってみた。

「ごめん、ね?」

上目遣いで最後には首を傾げて謝ってみる。どうだ！　母様直伝！

秘技☆懇願ポーズ！

すると、辟方は深々とため息をつき、首を左右に振った。

「お前な……そういうのは美人がやるから効果があるんだ。お前がやっても気持ち悪い。……いや、寧(むし)ろ哀れになってくるな」

辟方に憐憫の眼差しを向けられ、褒?は憮然とする。

だが、事実は事実だ。

褒?の母である三娘(さんじょう)は大陸一の美女と言われるほどの美の持ち主だ。武を好む彼女は、引き締まった美しいプロポーションの身体を持ち、しかしその顔立ちは凛々しさよりも可愛らしさが際立っている。緩く流れる薄青の長い髪は絹糸のようで、彼女を女性らしく華麗に彩っていた。

だが、その娘である褒？は、身体は引き締まっているものの母ほどの美しいプロポーションを持つには至らず、顔は平凡で簡単に雑踏に紛れ込んでしまえるほどだ。その長い髪と瞳はこの国では珍しい漆黒ではあるが、その色を持つ民族、夜郎（やろう）は人々から恐れ嫌われているためプラスの要素にはなりえない。
絶世の美女であった母ならば有効な技だったのだろう。だが、彼女に似ても似つかない褒？ではあの技は武器にはならず、寧ろ自分を傷付ける刃にしかならなかったようだ。

「むっ……正論過ぎて言い返せないのが悔しい」

今更ながらにその事実に気付いた褒？は唸りながら呟いた。
まぁ、憐れまれたのは腹立たしいが……。

「ぷっ……あはははは！」

褒？は突然の笑い声に驚いて辟方を見ると、何故か彼は腹を抱えて笑っていた。よく見ると目尻に涙が浮かんでいる。

「？」

何故彼がこんなにも大爆笑しているか分からない褒？は眉を寄せて首を傾げた。そんな彼女の様子に気付いた辟方は、肩を震わせながらもなんとか笑いを抑え込み、滲んだ涙を拭いながら乱れた呼吸を整える。

「くく……いや、悪い。まさかあんなことを言われて怒りもせず、それをそのまま認めるとは思わなくてな。流石噂に名高い“変人姫

”だけある」

褒?は彼の言葉の意味が理解出来ずに困惑した。

「?　なんで怒るの?」

「自尊心が高いから」

「事実なのに?」

「事実だからこそ劣っているのを認められないんだよ。自尊心の高い奴はな」

冷たい眼差しでそう吐き捨てた辟方は、嘲笑するように口端を歪ませて嗤った。だが、意味は分かっても理解出来ない褒?は、納得できるはずもなく、くっきりと皺が出来るほど眉を寄せる。

「……そっちの方がよっぽど変だと思うんだけど」

「くくく……そう言い切れる貴族はあまりいないんだよ」

難しそうな顔をして唸っていた褒?は、結局理解することを諦めてぼそりと結論を呟いた。それを聞いた辟方は、目を細めてやっぱり面白いと呟き、どこか満足そうに笑った。

＊＊＊

「一つ提案があるんだが」

「何?」

用意されていたお茶を二人で飲んで少し落ち着いた頃に、ぽつりと辟方が問いかけた。茶碗に口を付けていた褒?は、その体勢のまま

視線だけを彼に移して問い返す。
「お前との関係についてだ」
「？」
彼の真剣な眼差しに褒？は首を傾げつつも、お茶を飲むのを止めて、茶碗を包んでいる両手ごと太股の上に置いた。そんな彼女の動きを見つめながら、辟方は空の茶碗を手の中で弄んでいる。
「この婚姻は基本的には解消出来ん。縁談に全く乗り気ではなかった俺がこの話を請けたのは、俺にとって必要だったからだ。そして、お前もそうだと聞いている」
「え？　別に私は必要だったわけじゃないけど？」
褒？は当たり前のように否定した。
その予想外の返答に辟方は言葉に詰まる。しかも微妙に腹立たしい。
「……。じゃあ何故この縁談を請けたんだ？」
「父様と母様に絆されたから」
それ以外に請ける理由なんてあるの？　と不思議そうな顔をしている褒？。
一方、またまた予想外の返答をされた辟方は憮然として口を閉ざした。
……言外にお前には興味がないと言われた気がする。それ以前に、両親以下なんだな、俺。
そう思ったら何だか泣けてくる。何故だ……。
辟方は思わずつきそうになったため息を何とか飲み込んで、お茶を飲もうと茶碗を傾ける。だが、既に中身は空だった。どうやら、そんな事も忘れてしまうぐらいには動揺していたらしい。

再び茶碗を手で弄びながら呟いた。

「……。あー、兎に角乗り気ではなかったんだな？」

「そう」

やや疲れた顔で確認した辟方に褒？はあっさりと頷いた。

それを見てほっと安心したように息を吐いた彼は、最低限の条件は揃っているな、と小声で呟いて頷いている。

「なら、構わん。俺に協力しろ。そうすれば、俺はお前と契らん」

「……それ、拒否権は？」

辟方の様子に嫌な予感がして褒？は思わず訊ね返した。正直、権力の集中する場になど積極的に関わりたくない。面倒なことになること請け合いだからだ。

早々に逃げようとする褒？に辟方はにやりと笑った。

「拒否しても構わんぞ？　ただし、拒否すれば今すぐ契る」

「脅迫？」

「選択肢があるだけいいと思うが？」

全く悪びれる様子のない辟方に褒？は呆れてしまう。まぁ、分かりやすく正面から堂々と言ってくるだけマシか、と取り敢えず話を聞いてみる。

「否定はしないんだ……内容は？」

「囮になってもらいたい」

「もしかして暗殺者がいっぱい来るの？！」

辟方の言葉を聞いた瞬間、褒？の頭の中で“囮＋危険＝暗殺者”と

いう不可思議な式が出来上がった。そして、暗殺者に出会う機会(チャンス)が出来ることに鼓動がどくどくと力強く脈打ち始める。
自然と緩む頬を抑えきれずに身を乗り出して辟方に訊ねると、彼は身を引いて顔を引き攣らせていた。

「ま、まぁ、いっぱいかどうかは分からんが、何人かは来るんじゃないか？」
「やる！！」

褒？は即答で嬉々として引き受けた。

そしてその横では、彼女が引き受けたにも関わらず、複雑そうな顔をして彼女を見つめている辟方がいた。

初夜（3）（後書き）

これで一日目終了です。

少しずつ変人度が上がっていけばいいなぁ、と思ってます（笑）

褒?という娘（1）（前書き）

辟方視点です。

褒？という娘（1）

辟方（へきほう）は寝台の上に座ると深々とため息を付いた。

昨夜は常よりも早く寝たはずなのに、目覚めても何故か疲れていた。

横を見ると、すぴすぴとおかしな寝息を立てて、無邪気に眠っている褒？（ほうじ）が見えて無意識に眉を顰める。彼女の寝顔は幼く、これだけなら無知な箱入り娘にしか見えない。

だがしかし。

彼女の頭が乗っている枕の下には、実用的な短剣が隠されているのを辟方は知っている。というか、昨夜偶然見つけてしまった。

皇帝が通う寝室には武器の類が持ち込めないようになっている。ましてや彼女は今日後宮に来たばかりで、身元は分かっていても警戒されている人間だ。持ち物は厳しく検査されるし、今着ている夜着はこちらで用意した物だから、そこに仕込むことはほぼ不可能だ。侍女を懐柔すれば持ち込みも可能だろうが、簡単に懐柔できるような者は皇帝や皇后の近くにはいない。

とすれば、自分で持ち込んだことになる。はっきり言ってそんな隙はない。あるならば、暗殺者が続々と押しかけ、武に長けていない己の命は当に尽きていただろう。にも関わらず、武器はある。昨夜の千本然り、枕下の短剣然り。

はっきり言って彼女が本気でこちらの命を狙ってきたら死ぬ自信がある。断言出来ることが果てしなく情けないが……。

しかも彼女は、予想外にも嬉しい告白を大声で叫んでおきながら、自分が押し倒して迫っても顔を赤らめもしなかった。本当に慣れていないのかと疑問に思うほど動揺は見られず、こちらを真っ直ぐに睨みつけてただただ怒っていた。

なのに、だ。

暗殺者が来ると聞いただけで満面の笑みを浮かべ、頬を赤らめていた。

何なんだ、この差は？

自分は何処の誰とも知れぬ暗殺者以下なのだろうか？

俺、皇帝なのに……。

確かに権力欲のない娘を妻にと所望した。だからと言って、李辟方（こちら）に全く興味を持っていない娘の言動は地味に彼を傷付けていた。その傷を、暗殺者云々（うんぬん）の彼女の表情が見事に抉っていった。

何故こんな娘が己の妻なのだろう――？

複雑な心境にくっきりと眉間に皺を刻みながら、辟方は卓の上に避けておいた“花”を掴む。それは、昨夜この室を訪れた際に彼が持ってきた李花（すもものはな）だった。

婚姻の儀の内の一つ、『華連夜』。

花嫁が嫁いで来た初夜から数えて三夜、続けて花嫁の室に花婿が通

う儀式である。
儀式のしきたりで、花婿は部屋を訪れる際に切花を一輪持っていく。翌朝、寝台の上に茎を折った花が置いてあると、それが二人が契り花婿が“花”を手折った証とされる。
因(ちな)みに、あまり例はないが、契ることが出来なかった花婿は、持ってきた切花をそのまま持って帰ることになる。それが“花”を手折れなかった証となるのだ。

昨夜は結局、二人で話し合った後に褒?が寝入ってしまった。独り取り残された辟方は、帰る訳にも行かず、仕方なく同じ寝台に入って眠った。
つまり、彼らは契っていないのだ。とすれば、彼は花をそのまま持って帰るのがしきたりになる。

しかし。
このまま花を持って帰るのは、契れなかったことを公表することに等しい。それは出来ない、と男としての自尊心が邪魔をする。
暫(しばら)く手に持った花を見つめたまま迷っていたが、辟方は軽く手に力を込めて茎をしっかりと折ると、それを寝台の上に静かに置いた。
そっと屈んで眠る褒?の顔にかかる髪の毛をそっと横へ除(よ)けると、そのまま寝室を後にした。

褒?･という娘（1）（後書き）

まとめると長かったので、切りました。
続きは明日更新します。

褒?･という娘（2）（前書き）

引き続き辟方視点です。

褒?という娘（2）

皇帝の私室である通称“龍の間”。
辟方（へきほう）がそこに戻ると、すぐに側近である孔叔牙（こうしゅくが）がやって来た。

「お疲れのようですね」

常に笑顔を浮かべ穏やかに佇む彼は、弱冠２８歳でありながら国政を統括する天官の大夫になった実力者だ。彼はその能力を先代皇帝に認められ、１０年ほど前から辟方の側近として政務の補佐をしている。
だがそれだけではなく、辟方にとって叔牙は師であり兄であり友であった。彼は辟方が心安く共に居られる数少ない人間の内の一人で、その姿を見た辟方は、思わず叔牙を半眼で睨んでしまう。

「……あれはどういう人間だ?」

「あれ、ですか?」

突然の悪態にも全く動揺することなく、綺麗に笑ったまま問い返された辟方は苦虫を噛み潰したように顔を顰めた。

そもそも、辟方が叔牙に褒?のことを訊ねるのは当たり前なのだ。
叔牙は夷吾（いご）に師事していた過去があり、彼と旧知の仲であることは有名だ。その娘である褒?ともよく顔を合わせており、彼女の友人であると過去に叔牙が話していたのを辟方は覚えている。
ならば褒?という娘をよく知る叔牙に話を聞くのは、ごくごく基本的なことだろう。

そういったこちらの意図が分かっているのにも関わらず、敢えて訊ね返す胡散臭い笑顔が憎らしい。

「管褒（かんほうじ）？だ」

「皇后様ですか？　それならば以前調査書を奏上いたしましたが？」

「……」

「御覧になっていないのですね？」

そうだったかと、辟方が表情を変えずに記憶を掘り返していると、叔牙が重ねて問うてきた。その問いは、疑問系でありながら、既に答えを確信している問いかけだった。

「……お前と夷吾の推薦だ。二人のことは信頼している」

むっとしながらも、だから調査書など必要ない、と切って捨てた辟方に叔牙の笑顔が変化する。その顔は確かに笑顔なのに険しく、こちらを責めているようだった。

同じ笑顔なのに……。

「陛下。私共を信頼していただけることは大変ありがたく存じます。しかし、信頼と依存は違います。それは陛下の甘えであり、油断です。皇帝がそのような態度を取ってはなりません」

「……」

明後日の方向を向いて反省する様子のない主に、叔牙ははぁとため息をつく。それから彼は抱えていた書簡の一つを差し出してきた。

「以前奏上いたしました管褒？に関する調査書です」

その言葉に目を見開いた辟方は、慌ててその書簡を受け取り内容を

見る。

「管褒？は冢宰（ちょうさい）、管夷吾の一人娘です。幼い頃は両親と共に各地を旅し、６年前に我が国に居住。それ以後は上流階級の宴に出席しつつも、街の食堂で下働きをしたり、傭兵として隊商の護衛についたりなどと、貴族の姫らしからぬ行動を延々と繰り返し、“変人姫”と呼ばれる現（いま）在に至っています」

淡々と補足をしながら説明する叔牙の言葉に、辟方は頭の中に褒？の姿を思い浮かべる。ふと、そこで気になったことがあった。

「そういえば外見は両親に全く似ていないな。夷吾の祖先に夜郎（やろう）がいるのか？」

それもそうだろう。夷吾は金髪茶目、三娘（さんじょう）は髪も瞳も薄青で、その子供が黒髪黒目になる要素がどこにもない。それに加えて、この世界では身体に黒の色を持つのは夜郎の血をひく者だけであると決まっている。

だからこその辟方の問いかけであった。

「いいえ。彼女は養子です」

「養子？」

「はい。夷吾殿は婚姻前に国を出奔していたので、その事実を知っている者は少ないですが、本人も知っています」

そんな話は聞いたことがない辟方は不可解な顔をして首を傾げる。

だが、叔牙が断言するのであればそれは裏付けのある事実なのだろう。

だが、そうなると別の疑問が出てくる。

「ならばあの娘は夜郎なのか？」
「違います。確たる証があるわけではありませんが、夷吾殿がそのことについては断言していました。彼女には夜郎の血の一滴すら入っていないと」
「黒髪黒目で？」
「はい。あの方が断言するのですから、根拠がおありなのでしょう。ただそれを示さないだけで」

叔牙の考えには賛同出来る。
管夷吾という男は有能ではあるが一癖も二癖もある。しかし、祖国を愛する心に嘘はない。なにせその愛する国のために、一度は出奔したこの国に舞い戻ったほどだ。
だからこそ、夷吾は忠誠を誓った主である辟方に決して嘘はつかない。国の大事が関わっているならば尚更だ。

だとすれば。

何故褒？はあんなにも暗殺者に会えることを喜んでいたのだろう――？

「……ふん。夜郎ならばあの態度も頷けるのだがな」
「あの態度？」
「囮になれ、と告げたら暗殺者が来るとはしゃいでいた」
「それは……」

流石の叔牙でもそれは予想外の反応だったのだろう。珍しくも目を開けて絶句していた。
辟方はそんな彼の様子を面白そうに眺めながら笑って問いかける。

「己が夜郎ならばその理由にも納得がいくだろう？」
「……強ちその考えは間違っていないかもしれません」
辟方の問いに暫く何かを考えていた叔牙は、苦笑を浮かべて肯定した。その意味が分からず辟方は目を丸くして先を促す。
「うん？」
「彼女は自分と同じ色を持つ者に興味を持っていました。……それに、彼女は三娘殿に似て強い者が好きなので、単純に会って戦ってみたいのではないかと」
「戦闘狂いなのか？」
「どう、でしょうか。彼女は積極的に喧嘩を売りませんが、売られた喧嘩は必ず買うので」
「……厄介な」
げんなりと呟いた辟方に、叔牙は楽しそうに付け加えた。
「陛下よりも強いですよ。私でも接近戦では敵いません」
「お前は中距離や遠距離の方が得意だろう」
「それでも負けはしませんが勝つことも出来ないでしょう」
「それほどか……ふむ、李周といい勝負が出来るかもしれん」
顎に手を当てて褒？の実力を予想した辟方がぽつりと呟く。しかし、その呟きを聞いた叔牙は困ったように苦笑した。
「李周様がお相手では彼女の負けでしょう」
「何故だ？」
「彼女は武に優れておりますが、智には優れてはおりません」
しれっと放たれた叔牙の台詞は多分に失礼なものだった。そのあま

りの言い様に辟方は目を見開き、それから盛大に呆れてしまった。

「はっきりと言うな？」

「事実ですから」

「ふん、覚えておこう」

苦笑した辟方を叔牙はじっと観察する。

智に優れるも武に向かない辟方と、武に優れるも智にむかない褒？。二人が協力すれば、互いに足りない部分を補い合っていけるだろう。だからこそ、叔牙は妻として申し分ないだろうと彼女を推したのだ。

そんな叔牙の様子に気付いたのか、辟方は更に苦笑を深めた。辟方とて分かってはいるのだ。正面にいる彼が自分のために策を弄していることくらい。

そして、彼女を退けるという選択肢を持つことが許されない以上、今ここで彼女に悪印象を持つことは得策ではないということも。

ただ、叔牙は少し思い違いをしていた。というより、主の性質を忘れていた。

辟方は決して褒？を苦手に思ったわけでも、嫌悪したわけでもなかった。

彼女のその変人ぶりの片鱗を見て、我慢していたのだ。

彼女を愛でてしまわないように。

褒?という娘（2）（後書き）

徐々に色々な片鱗が見え始めました。

けれどこの時点だと一番ヤバそうなのは辟方な気がする……

おかしいな……、一番ヤバイのは別の人の予定なのに……

二日目　～真実の欠片と褒？のお願い～

私は特別なものなど何もないような所に住んでいた。少し歩けば田んぼのための水路（かわ）があって、林や山があって、肝試しにもってこいの墓地があって、幼い私が無邪気に過ごす分にはそれで充分だった。

私がいつも遊んでいる遊び場。そこは学校の校庭と一緒になっていて、その広大な土地には鉄棒や運悌はもちろんのこと、カラフルなタイヤで作られた馬とび台、同じタイヤと土管で作られた山、ブランコ、シーソー、ターザンが出来る滑車などまるでアスレチック公園のようだった。

そこで、私はいつも遊んでいる。近所――と言っても歩くと２０分程離れている――の家の３つ上のお兄ちゃんとその友達の男の子たちに混じって、鬼ごっこやかくれんぼ、ドロケイ、どんふみなどをして、５時の放送があると家に帰るという日の繰り返し。

平凡で当たり前の日常が、どれほど幸せであったか、この時にはまだ何も理解（わかって）していなかった。気付けてすらいなかった。

そして、日常というのは、突然起こる非日常によって簡単に失ってしまうものであるということも。

私はいつものようにお兄ちゃんたちと隠れ鬼をしていた。

鬼に見つかりそうになった私は、全速力でカラータイヤの山を登ってから再び下りて土管を潜る。音が響く土管の中は忍び足で静かに歩き、後を窺いながら進んで外に出ると、さっきまでより明るい光が目を刺した。

「え？」

私は立ち止まって呆然と呟く。目の前に広がっていたのは見慣れたタイヤ山ではなく、見たこともないほど高い山々と点在する薄桃や碧(みどり)の色とりどりの湖、そして大地の変わりに広がる雲海。

「うわぁ〜！　何これ！　すごぉーいっ！！」

見たことのない壮麗な景色に目を奪われてそのことしか考えられなくなる。

私はその景色をもっとよく見たくて、棚台になっている岩の淵に立った。そこから身を乗り出して下を覗き見ると、自分が今居る場所がどれだけ高いのかが分かって吃驚する。高層ビルなど全くない場所で育ったため、3階建ての学校の屋上以上に高い場所に上ったことのない私は、そのあまりの高さにゾクゾクして楽しくなってきた。

だがそこに突然風が吹き荒れて、私はそのまま真っ逆さまに落ちそうになった。慌てて手に力を入れて、落ちそうになる身体を棚台に引き戻すと、背後に巨大な気配を感じる。さっきまでなかった気配を不思議に思い、振り返ろうとした私に低い低い声が響いた。

「汝、我が求めに応えし者か？」

「え？」

問いかけの意味が分からなくて私はばっと振り返った。目線の先には、其処にあるはずの土管がいつの間にか消えていて、あったのは登れないほど高い石壁と見たこともないほど巨大な黒い影。その影が口を開いた。

「この地に縁(えにし)を持たぬ者よ――汝に我が祝福を与えよう」

その言葉と共に与えられた――痛み。

＊＊＊

勢いよく目を開くと、そこには見知らぬ天井が広がっていた。
褒(ほうじ)？は少し考えて、そこが管家の屋敷ではなく、後宮にある新たな自分の寝室であることを思い出す。

「……私、嫁いだんだった」

久しぶりに視た夢のせいで記憶が混乱していた。

「もうずっと視てなかったのに……」

ぽつりと呟いた声は、微かに震えていた。

褒？はきつく目を瞑る。するとさっきまで視ていた夢の残像が甦ってきた。無意識にお腹を押さえながら思い出す。

あれはこちらに来た時の記憶だ。まだ管褒？ではなかった頃の自分。

「14歳にもなって隠れ鬼で満足とは、私も随分無邪気だったんだな……いや、こっちだと7歳か」

以前いた日本という国。それはこの世界――天彌宮(てんびきゅう)には存在しない。
天彌宮に存在する国家は茜、湯、波、炎、兎、貝、象、融の僅か八国、それ以外は少数民族の独立自治領が散らばっているだけ。そし

て、彼女の目の前に広がった世界は日本とは全く違うものだった。
天体、大地、草原、田畑、森、山、何よりも見たことのない建築様式の街、建物、衣服。
その中でも一番の違いは言葉と文字だった。とは言え、こちらに来て既に八年も経っている褒?には問題のない違いだが。

そんなことをつらつらと考えながら、ふと横を見るとそこには誰の姿もない。褒?が手を伸ばして横の布団を触ってみると、其処は冷たくなっていた。
横に寝ていたはずの夫、辟方(へきほう)は随分と前に起きて室(へや)を出たようだ。

「ん?」

辟方がいたはずの白い布団の上に鮮やかな色があるのに気付いた褒?は“それ”を持ち上げる。

「李花(すもものはな)……?」

その“花”の意味を知らない褒?は、茎の折れた李花を見て首を傾げた。

「お目覚めになられましたか?」

考えごとをしていたせいで人の気配に気付かなかった褒?は、反射的に枕の下に手を突っ込みながら声の主を見遣る。そこには見慣れぬ女性が微笑んでいた。
彼女は笑顔で寝台に近づくと、褒?の持っている“花”に気付いてきょとんとした。

「あら? ……まぁ! 陛下が皇后様をお待ちになられていたのは

本当だったのですね！」
「え？」
「ずっと皇后様御一人を一途に想っていらっしゃったのですね……。感激ですわ！」
「は？」

両手を合わせてうっとりと呟く彼女を、ついていけない褒？はぽかんと口を開けて見つめる。

「えっと……？」

確か彼女は昨日慌しく紹介された人の中にいた気がする。だが、誰だか思い出せない褒？が困ったように聞くと、漸（ようや）くそんな褒？の様子に気付いた彼女が優雅に礼をした。

「この度皇后様付きの第一侍女の任を拝命（つかまつ）仕りました陳梅瑛（ちんばいえい）と申します」
「宜しくね、梅瑛。覚えてなくてごめんなさい」
「いいえ！　お気になさらないで下さい！　昨日は慌しくてきちんとご挨拶出来ませんでしたから」
「そう言って貰えると助かるわ」

褒？がにっこりと笑って言うと、何故か梅瑛はうっとりとして頬に手を当てた。何故そんな反応をされるのか分からなくて訝しげに彼女を見ていると、彼女の瞳がじんわりと潤んでくる。
益々不可解な彼女の反応に訳も分からず寒気がした。

「ど、どうしたの？」

動揺して少しどもりつつ、褒？が問いかけると、ぱっと瞳を輝かせ

た梅瑛が膝をつき、がしっと褒？の手を両手でしっかりと握って訴えた。

「私（わたくし）、嬉しいんです！　陛下の長の想い人が皇后様のように臣にも心を砕いて下さる方で！今まで乗り込んできたのは愚かで醜いお馬鹿さんばかりで……。また欲に目の眩んだお馬鹿さんが来たら、今度こそ私たちの手で！　と気を揉んでおりました。しかし、それは無用の心配でしたわ。何より皇后様は陛下がお選びになられた唯一人の御方……。その皇后様ならば私たちも心よりお仕え出来ますわ！」

「……よく分からないけど、梅瑛は面白いね」

キラキラと瞳を輝かせて見つめてくる梅瑛に、褒？はゆっくりと笑った。梅瑛はその言葉と笑顔を見て、感極まったように目に涙を溜めるも、それを零すことはない。それを見て褒？は何故あんなにも溜まっている涙が流れないのだろうとよく分からないことを考える。

「ああ！　皇后様！」

すると何故か叫ばれた。
訳が分からないながらも、あのテンションについていきたくない褒？は、それを今追求するのは諦めて昨日から思っていたことを口にした。

「梅瑛、私のことは褒？と呼んで？」
「そんな！　それは光栄至極に存じますが、恐れ多いことですわ！」

後宮という場でこんなことを言うのは決して誰かのためなどではなく、ただの我が儘だろう。だが、これから自分の傍にいてくれる梅瑛には“皇后”という号ではなく自分の名を呼んで欲しかった。

梅瑛がこのお願い拒否するのは正しい判断だと分かっている。だからといって褒?には命令する気もなかった。それでは意味がないのだ。
この件について褒?は全く折れる気がない。その想いを込めてじっと梅瑛を見つめて重ねてお願いする。

「私からのお願いよ」
「……畏まりましたわ、褒?様」
「ありがとう」

暫くの間、褒?の目を申し訳なさそうに見返していた梅瑛だったが、相手に折れる気配がないことを悟った彼女は、降参して困ったように笑って頷いた。その笑顔に、褒?は嬉しそうに微笑み返した。

二日目　～真実の欠片と褒？のお願い～（後書き）

遅くなりましたが、無事更新出来て良かったです。
今回の話は二つに分ける予定だったのですが、中途半端だったので１話にまとめました。
そのため通常より少し長くなってしまいました。
すみません。

ここから色々と始動する予定なので、どんどん楽しくなる、はず（笑）
どうかお楽しみに～

前室

軽く朝餉を食べた後、褒(ほうじ)?は梅瑛(ばいえい)に容赦なく飾り立てられた。
豪奢に飾り付けられるのが嫌いな褒?は、しかしこれも皇后の務めの一つと自分に言い聞かせて我慢した――はずが、さっきからボロボロと本音が零れ落ちている。

「じゃらじゃらと邪魔臭い……頑丈じゃないから武器にも使えないし布が多すぎて動きづらいしこんなにヒラヒラさせなくても綺麗に見せることならいくらでも出来るじゃない」

本人は内心で呟いているつもりなのだろうが、小さくではあったが確実に音になっていた。それを聞いてしまった梅瑛は、流石に目を丸くする。

“変人姫”と称される元となった噂の数々は知っていた。だが噂というものは往々にして尾鰭が付くもので、梅瑛としては、それは権力者の情報操作の一つという認識をしている。ましてやその姫が冢宰である管家の一人娘であれば、父親の権威の失墜を望む数多の輩が積極的に悪意ある噂を流すだろう。
だから梅瑛は端(はな)から噂を信じていなかった。どうせちょっとした失敗を適当に大きくしたものだろうと。
しかし、その考えはどうやら正しくはなかったようだ。自分は彼女のことを少々見誤っていたらしい。

そんなことを考えられているとは知らない褒?は、尚もぶつぶつと小声で毒を吐き続けていた。

「失礼致します」

「どうぞ」

と其処に、落ち着いた温かさの感じられる声が響いて、室(へや)に一人の女性が入って来た。白髪交じりの髪をきちっと結い上げ、立ち姿の美しいその女性は、褒？の前で立ち止まると流れるように立礼する。その礼はとても自然で、華やかさは感じられないが、今まで見た誰の礼よりも美しかった。

「お初に御目文字仕ります。私(わたくし)は後宮女官長の任を拝しております鄭小瑛(ていしょうえい)と申します。昨日(さくじつ)は御挨拶も申し上げられずに大変失礼致しました」

その隙のない身のこなしに見惚れて褒？の口許が綻ぶ。

「これから宜しくね、小瑛。それから、私は気にしてないわ。貴女が陛下についているのは知っているもの。私には梅瑛がいるから、小瑛には陛下を第一にお願いするわ」

「お心遣い、感謝致します」

褒？が言外に滲ませた「自分への気遣いは無用」という意味を正しく汲み取った小瑛に、褒？は満足げに頷く。それを確認してから小瑛が梅瑛に向き直ると、彼女は上官に対する礼をした。

「皇后様の御準備、滞りなく調(ととの)っております」

「そう。……皇后様、本日の公務の御説明を致します。婚姻の儀の二日目である本日は、これから王宮前広場にて“民許の賜り”の儀を執り行います。その後、陛下と共に大宗廟に詣でて頂き、王宮に戻っていらしたらそれで本日の公務は終了になります」

「貴女の心遣いに感謝するわ」

梅瑛の報告に軽く頷いた後、淡々と今日の予定を説明した小瑛を褒？は労った。それに返礼をして応えた小瑛は、「それでは」と言って褒？を促してしずしずと室を出て行く。その後に、少し歩きづらそうにしながら褒？が続いた。

＊＊＊

茜国の王宮は“玉橙宮”と呼ばれている。国の国色である橙の屋根と、国の特産物である玉を、王宮の要である玉座と誓言の間の国章の壁に使っていることからそう呼ばれるようになった。

そして、この王宮には他国の王宮とは違う特徴がある。それが王宮広場を見渡せる“円舞台”と呼ばれる場所だ。

茜国がある大大陸。其処にある他の三国では皇帝は雲上の存在で民草の前にその姿を晒すことはない。

しかし、唯一茜国だけは違った。

初代茜国皇帝――始まりの皇帝として臣民から敬愛の念を込めて“橙祖帝”と呼ばれている――は皇帝位に就いてから、民と交わる機会がないことに不満を抱き、民との繋がりの場を求めた。その結果、王宮に後から造られたのが玉橙宮の円舞台だ。

なるべく多くの人を集められるよう造られた広大なスペースの王宮前広場。その何処からでも見えるよう設計された円舞台は、国の儀礼や祭事によく利用され、その都度民は皇帝や皇族の姿を垣間見ることが出来る。言い換えれば、その機会にしか見られないのだが、それ故に数少ないその機会には広場に民が殺到し熱狂するのが茜国の常だった。だからこそ茜国では、皇帝は雲上の人ではあるが、畏敬の念を抱く相手ではなく、敬愛の念を抱く相手であるのだ。

そんな円舞台に続く道に繋がっている小室――通称“前室”――に褒？が入ると、そこには既に嘉礼服を隙なく着込んだ辟方（へきほう）が待っていた。
堂々としたその立ち姿に「うん」と一つ頷いた褒？。その後で梅瑛がほうっと感嘆を漏らす。
どうやら見惚れているらしい彼女に苦笑していると、外を眺めていた辟方がこちらを振り向いた。

「早いね？　仕事してたんじゃないの？」

彼に歩み寄りながら褒？がそう言うと、辟方が驚いたように軽く目を見開いていた。その反応の意味が分からなかった褒？はきょとんとして辟方を見つめる。
と、彼の横に立っていた叔牙（しゅくが）も表情こそいつもの笑顔だったがア然としている気配がした。
更に首を傾げた褒？がちらっと後を振り返ると、目を丸くしている小瑛とはっきりと驚愕している梅瑛が見える。褒？の視線に気付いた小瑛は、すぐに取り繕って微笑んだが梅瑛は未だに口を開けて驚いている。
思わず眉を寄せて再び視線を辟方に戻すと、彼は何故か可笑しなものでも見たように笑っていた。

「そっちこそ遅かったな？」
「質問に質問で返さないでくれる？」

それでも辟方に普通に話しかけられたので、褒？は素直に反論した。とは言え、皆の訳の分からない反応と辟方の返答に不満が溜まっていた褒？は、ぶすっとした顔で辟方を睨んでいたが。

そんな褒？の様子には一向に頓着せず、不敵な笑いを浮かべた辟方は話を進める。

「まぁな。それで？」
「答える気はないわけね。なら私も答えない」
「はぁ？」
「何か文句でも？」
「っははははは。子供みたいな拗ね方だな？」
「うるさい」
「はは……俺は、朝の仕事が思いの外早く終わったんだよ」

こんなことで拗ねるなんて意外と子供っぽいな、と思いながらも段々と据わっていく褒？の目に、これ以上からかい続けるのは不味い、と読み取った辟方は漸くからかうのを止めて先ほどの褒？の問いに答えた。
しかし、既に機嫌を損ねていた褒？はそこで素直に答えられるほど大人ではない。そっぽを向いたまま頑なに口を噤んでいると、堪えるような小さな笑い声が聞こえた。
それを聞き咎めた褒？は、声の主をムッと睨みつける。すると、その視線に気付いた辟方は、笑いながらも次はそっちの番だと、目で促した。
それで少し冷静さを取り戻した褒？は、室内に生暖かい空気が漂っているのに気付いた。自分達を侍女たちが微笑ましく見守っている。そこで褒？は先ほどまでの遣り取りがいかに子供っぽいかに気付いてしまった。あまりの恥ずかしさに、カッと頬に血が上る。
流石に決まりが悪くて、俯いて視線を辟方から逸らしつつぼそぼそと小さな声で呟いて答えた。

「……私の呼び方で、少々お願いをしてて」

ごにょごにょと答え始めた褒?を辟方は微笑ましく見守っていたが、彼女の答えは彼の予想したものとは違っていたので思わず問い返してしまう。

「呼び方?　それだけ?」

「他に何かあるの?」

そんな彼に褒?は不審そうな視線を向ける。その視線に少し怯みつつも、辟方は好奇心に負けて聞いてしまった。

「……李の花はどうした?」

「ああ、あれ、辟方が置いていったの?」

褒?が辟方の名前を気軽に呼んだことに、侍女二人がまた驚いた。小瑛は驚いたまま「花……」と小さく呟いている。どうやら彼女は花のことを知らなかったらしい。

大きな驚きの中にいる侍女たちとは対照的に、叔牙は一人可笑しそうにクスクス笑っていた。

そして辟方はそんな外野を無視して話を進める。

「まあな」

「ふーん、それなら昨夜直接渡してくれればよかったのに」

「……」

辟方に習って褒?も外野を無視して軽く相槌を打った。

すると、辟方がぽかんと目を見開いている。はっきり言ってマヌケ面だった。折角きっちり着込んでいるのにそのマヌケ面のせいで総てが台無しになっている。

それ故に彼の驚きが大きいことを示されて、そんなに驚かれる覚えのない褒?はきょとんとしてしまう。

褒？が周りを見回してみると、皆がア然と褒？を見ていた。
またもや理由（わけ）の分からない皆の反応に苛々が積もる。これではまるで自分が無知だと言っているようではないか。
そんな彼女に気を取り直した辟方が躊躇いがちに訊ねた。

「お前……華連夜がどういう儀式か知ってるか？」
「馬鹿にしてるの？　初夜の性交ことでしょ？」
「いや、まぁ、そうだが……」

そんなことを聞かれるとは思っていなかった褒？は心外だと辟方を睨みつけ、早口に言い募る。
怒りも露（あらわ）に直接的な言葉で答えた褒？に辟方の口元が引き攣った。
それに気付かないのか褒？は彼を睨みつけたまま捲くし立てる。

「それを三夜連続でやるのが華連夜でしょ？　それ位ちゃんと父様が教えてくれたわよ」
「……夷吾（いご）の仕業か」

片手で目を覆い、小さく呻いた辟方。
その呟きで大まかの事情を察した小瑛と梅瑛、そして大体の事情を把握していた叔牙。その三人の脳内ににこやかに笑う夷吾の姿が浮かんだ。

前室に奇妙な雰囲気が流れる。
それを破ったのは、叔牙だった。彼は困ったように苦笑すると、褒？に説明してくれる。

「皇后様、華連夜の儀式では夫婦が契った証として、翌朝に男が花を置いていくんですよ」

「は？」
「新婦を花に見立てて、その花を手折った証として茎を折った花を置いていくんです」
「何で？」
「まぁ、周りに判るようにするために、ですね」
「？？　じゃあ何で今朝花が置いてあったわけ？」
「……」

流石の叔牙でも其処は言葉にはしなかった。その代わりに、にこにこにこと笑顔を向けられる。
その意味に気付いた褒？は目を丸くして慌てた。ばっと振り返ると、小瑛には微笑みながら軽く礼をされ、梅瑛には感激で輝かせた瞳でじっと見つめられた上に、合わせていた両手をサムズアップされた。
貴族のお嬢様なのにそんな平民の仕草をよく知っているな、と褒？はつい関係ないことを考えてしまう。
しかし、そうやって現実逃避しても事実はひとつだ。
ぐりんっと首を勢いよく回すと、辟方を睨みつけながら彼に詰め寄った。

「ちょっとどういうこと？！」

褒？は声を荒げて問い糺(ただ)そうとした。
しかしタイミング悪く前室に春官が入ってきて、時間が来たことを告げられる。流石に知らない官吏の前で皇帝を問い糺すわけにもいかず、褒？は言葉を飲み込んだ。
すると、辟方がにやりと笑って手を差し伸べてくる。褒？は眉を寄せて厭そうにその手を見つめると、仕方なくそこに手を重ねた。
そして、前室を出て円舞台に続く道を二人一緒に歩き出した。

前室（後書き）

今回はちょっと長めです。

というか、書いてて思ったんですが。
こんな遣り取りばっかりしてて本当に惚れられるんか？
ちょっと疑問に思ってしまいました。

ははははは。

幕間　突きつけられた条件１（前書き）

本編が始まる前の話です。

幕間　突きつけられた条件1

「陛下、聞いていますか？」
「あ？　聞いてない」

主であり、この国の皇帝でもある李辟方の気の抜けた返事に、此方の力も抜けてしまいそうになる。
今、この皇帝の執務室には側近である孔叔牙しかいないのでいいものを、こんな姿は諸官には見せられない。大事な忠臣を失い、隙を窺っている奸臣に好機を与えてしまいそうだ。
ただ、その気持ちも分からなくはないので、諌めることはせずに苦笑するに留めた。

「これ以上后位を空けておくわけには参りません。それについては私も冢宰に賛同します」
「分かっている。……が、憂鬱なことに変わりはない」

健全な青年である主が、女性を忌避するほど嫌がる様に同情を禁じえず、叔牙はつい期待させるようなことを言ってしまう。

「しかし、今までの方たちとは違うと思いますよ」
「そう言えばお前は相手の女を知っているんだったな」
「ええ。少し変わっていますが、面白い方ですよ？」
「それは褒め言葉か？」

呆れたように聞いてきた辟方に微笑みつつ頷いた。だが、叔牙の言葉に興味を持った様子は全くなく、まだ嫌そうに眉を顰めている。
とはいえ、問答無用で拒む様子はないので一応は納得しているらし

い。本気で嫌ならば、これまでのように誰が何を言っても聞く耳を持たないからだ。

（流石に冢宰の泣き落としは効いたようですね……）

冢宰である管夷吾（かんいご）も、今まで決して表に出すことはなかった愛娘を推薦することで身を切っている。その覚悟が、結婚はしないとまで言い張っていた辟方を説得したのだ。

「そう言えば、冢宰から文が届いております」

「何だ？」

主に促されてそれを開いて読むと、叔牙は思いっきり眉を顰めた。側近の珍しい様子に辟方が怪訝な顔をする。

文を読み終えた叔牙は少し困ったように笑いながら、それを辟方に差し出した。滅多に変わらない側近の表情を変えた文に何が書かれているのか、むくむくと好奇心が湧き、それを受け取るといそいそと読んだ。

曰く――

初めまして、陛下。この度縁談相手になってしまいました管褒（かんほうじ）？と申します。

この結婚を承諾するにあたっていくつか条件を付けさせていただきます。

一つ、護衛は必要ありません。邪魔です。

一つ、定期的に休暇をいただきます。

一つ、私の奇行には目を瞑って下さい。

一つ、性交の際には必ず目隠しをしていただきます。

以上のことを踏まえた上で話を進めて下さい。承諾出来ない事項が

ありましたなら、父、管夷吾と相談なさって下さい。私の意向は全て父に伝えてあります。
本題だけですが、これで失礼致します。
管褒？
――
「お変わりないようですね」
この文を読んでそんな感想を言った叔牙に、辟方は思い切り呆れた。
「なんなんだ、色気も素気もないこの文は？　まるで男が書いたみたいじゃないか。しかも、護衛は邪魔だとか休暇をよこせとか。あまつさえ、奇行をすることは決定なのか？　加えて、これはなんだ？　貴族の子女が性交の方法を堂々と要求するな！」
常識を知る者としては当然の疑問であり、反応である。だが、彼女の奇行を知る叔牙からすると、理解は出来ないまでもそれほど驚くことではなかった。
（流石に四つ目の条件には驚きましたが……他は概ね想定の範囲内ですね。とは言え、ここまで直接的に要求してくるとは思いませんでしたが……）
文を読んで、理解出来ないという顔をして悩んでいる主を見守りながらそんなことを思っていた。
考え込んでいた辟方は自分なりの答えを見つけて、叔牙に問う。
「これは遠回しに縁談が嫌だという意思表示か？」

「いえ……嫌ならはっきりと断るでしょう。承諾すると明記している以上、納得なさっていると思いますよ」
「ではこれは本気で本人が望んで書いたのか？」
「おそらくは」
「……そんな変人と俺は結婚するのか？」

そんな呟きに叔牙は言葉を詰まらせた。その言葉が真実である以上、何を言っても空しいだけだ。
その先では、辟方が困惑しつつも密かにショックを受けていた。心の声が漏れている。

「いくら婚姻が自由にならないとはいえ、俺は変態を娶るのか……？」

予想以上に沈んでいる様子に、叔牙は気を紛らわせるように微笑んで言った。

「しかし彼女が権力にも財力にも興味がないのは事実ですよ。それに陛下の嫌いな媚びるタイプの女性でもありません」
「生理的に無理でなければそれでいいのか？　どれだけ妥協せねばならないんだ……」

良い面を見せて励まそうとした目論見は見事に外れ、彼は余計にショックを受けてしまった。こうなると何を言っても逆効果になる気がして叔牙は苦笑する他なかった。

幕間　突きつけられた条件１（後書き）

王様って可哀想な人種ですよね。

自分で書いといてなんですが、つくづくそう思います。

幕間　突きつけられた条件２（前書き）

幕間の続きです。

幕間　突きつけられた条件2

翌日。
朝議が終わり、執務室にこもって仕事に励む辟方（へきほう）と叔牙（しゅくが）の元に冢宰（ちょうさい）である管夷吾（かんいご）がやって来た。

「おはようございます、陛下」

にこにこと笑顔で礼をする彼を、辟方は胡散臭そうに眺める。

そもそも冢宰は百官の長であり、官吏の頂点に立つ者だ。欲望渦巻く宮廷で見事その地位を勝ち取り、何事もないかのように立ち回っている彼は徒者（ただもの）ではない。

正直、辟方には曲（くせ）しかないように見える。
宮廷で育ち、次期皇帝として、人々の欲望と思惑の中で生きてきた辟方は人の心の機微には敏い。だから、何か企んでいる者がいれば、その何かは分からずとも企んでいることくらいは分かる。
けれど、夷吾に関しては腹の内が全く読めないのだ。裏があるのか、企みごとがあるのか、それすら分からない。気取らせない。

政事に関して、夷吾が自分の味方であること、自分を支持していることを疑うことはない。それだけの信頼は築いている。
だが、もっとレベルの低い問題になると一気に怪しくなる。
夷吾は何事も楽しむ癖がある。そして、性質（たち）が悪いことにそのための努力を惜しまないのだ。
そのせいで散々遊ばれてきた。だからこそ、どこかにアラがないか探してしまう。

「そんな目で見てどうかなさいましたか？」
のほほんとすっとぼける夷吾に、ビキッと音を立てて青筋が浮かんだ。いつもながら人の神経を逆なでする腹の立つ男である。
そんな二人の様子には慣れている叔牙は、淡々と自分の仕事をこなしていた。叔牙は自分の敵わない相手に無闇に突っ込むほど愚かではない。夷吾のことを辟方よりもよく知る彼は、こういう場では沈黙をもって見守るのが常だった。
「文を読んだ。お前の娘からのだ」
「あの子は文（ふみ）を書くのが苦手なのです。しかし陛下のために頑張ったのですよ」
初々しくて可愛い娘でしょう？　とにこやかに聞いてくる彼に辟方の口元が引き攣る。今まで彼の親馬鹿な発言を聞いたことがないわけではないが、ここまでとは思わなかった。
「どこがだ！　何なんだ？　あの男らしい文は？」
「陛下はお忙しいですから、時間を取らないようにと気を利かせたのですよ」
健気でしょう？　と本気で感激している様子の夷吾に、ついに頭が壊れたかと本気で思ってしまう。
しかし彼のその様子で後の展開が読めてしまい、辟方は憮然とした。だが、何も言わないままでは気が済まない辟方は、目を据わらせながらも文句と疑問を口にする。
「……。護衛が邪魔だと書いてあったぞ？」
「国のための兵ですから、自分に付いてもらうのが申し訳なかった

ようです。それに妻の教えであの子も身を守る術(すべ)を持っていますから」
「休暇が欲しいと書いてあったが？」
「親思いの子で私たちに会えないのは寂しいと言ってくれるのですよ」
「奇行に目を瞑れと？」
「自分が箱入りであることを知っていますから。何かおかしな振る舞いをしてしまうかもしれないと不安なのです」
「……。……性交の際に目隠しをしろと書いてあるのはどう説明する気だ？」
「あの子は恥ずかしがり屋でして。陛下に見られるのが恥ずかしくてそんな条件をつけたのですよ」
「本当の恥ずかしがり屋は堂々と性交の方法など要求して来ん！！」
にこにこと笑顔で娘を――強引に――褒める夷吾に辟方が吼えるも、全く堪えていない。それどころか何故可愛さが分からないのか、と不思議そうな顔をされてしまう。
流石にいたたまれなくなった叔牙が、ややぐったりとしている辟方を庇い、話を進める。
「夷吾殿、褒？様が提示なさった条件のいくつかは承諾しかねます」
「護衛は少数の精鋭をつければ事足りるでしょう。休暇は無理を押し通して作る必要はありません。ただ、休める時間が欲しいことを陛下にご承知いただいていればそれで構いません」
話が進んだことで夷吾はふざけていた父親の顔を改めて、真剣な官吏としての顔で言った。相変わらずの素早い切り替えに感心しつつも、辟方は承諾の意を示すために軽く頷く。
「奇行については慣れていただくしかありません。普段の生活に支

障をきたすようなことはないと思いますが……」
「そこはどうしても目を瞑る方向に向かうのか？」
少々呆れ気味に問う辟方に、真剣な顔のまま夷吾は頷いた。
「褒？は育った環境が特殊なため、私たちとは異なる価値観を持っています。以前よりは馴染みましたが、完全ではありません」
「特殊な環境？」
「はい。何れ表面上は上手く振舞えるようになるかもしれません。ですが、はっきり言って今の上流階級には馴染めないでしょう」
仕事時の夷吾らしくない言い様に辟方は怪訝な顔を向ける。また自分を試すつもりなのかと睨みつけるが、彼は顔色を変えることなく真剣な目をしたままだった。
彼の真意を汲み取れなかった辟方は、取り敢えず思いついたまま問うて見る。
「旅をしていたからか？」
「それもあります」
「……詳しく話せぬ理由でもあるのか？」
「いいえ。ですが、それは関係ないのですよ」
あまりにも素っ気ない返答に、隠しごとがあるのかと問い詰める。すると、あっさりと予想外の言葉が返ってきた。
珍しく苦笑している夷吾に辟方は困惑する。
「関係ない？」
「はい。どんな理由があろうとも、あの子が私たちの可愛い娘であることに変わりはありませんから」

またしても夷吾らしくない言葉だった。と言うか、それはただの親馬鹿発言だろう。
しかし、清々しく笑って返された答えに思わず納得してしまい、毒気を抜かれてしまった。
そんな辟方ににっこりと微笑んでから、夷吾は少し哀しそうに付け足した。

「それにあの子はあまり過去については語りたがりません」
「何か、悪い思い出でもあるのか？」
「それについては何とも。ですから、無理に聞き出そうとしないで下さいね？」

夷吾の悲哀に満ちた微笑みに釣られて、うっかり褒？の過去に同情してしまった辟方が思わず聞き返すと、それはそれは綺麗な笑顔でずっしりと釘を刺された。
彼の思惑に乗ってしまったことに気付いた辟方は小さく舌打ちしつつも、頷いた。

「覚えておこう」
「……何やら瞳が輝いておりますが？」
「むっ」

どうやら辟方の魂胆はすっかりバレていたらしい。小さく呻きつつも、未だに確約を口にしない彼に、夷吾が笑顔で凄んできた。
その笑みが逆に恐怖を引き立て、流石に恐ろしくなった辟方は仕方なさそうに約束する。その返事に満足した夷吾は凄んでいた顔を元に戻し、それを見た辟方はほっと安堵の息をついた。
二人の対決に決着が付いたのを見計らって叔牙が声をかける。

「陛下、最後の条件についてお訊ねしなくて宜しいのですか？」
「そうだった。あれは――」
「最後の条件に関しては、一切の譲歩をする気がないとのことです」
辟方の言葉を遮って、夷吾がきっぱりと言い切った。
「あれが最重要条件で、あの条件を飲んでいただけないのならば、他の条件を飲んで下さっても婚姻に承諾は出来ないと」
続けて述べられた言葉に、辟方と叔牙は絶句してしまう。
一番どうでもよさそうな条件が最も大事で絶対だ、などとのたまう褒？もそうだが、それを是として聞き入れた夷吾にも驚きを隠せない。
「……」
「……」
言葉が出ない二人は、どちらからともなく互いに目を合わせる。その表情を見やるに、お互いにどうも同じ様なことを感じているようだった。
辟方は一度俯くと表情が見えないまま小さく呻いた。
「そんなに目隠し行為（プレイ）がいいのか……」
「陛下……」
またもや落ち込んでしまったのかと思ったが、かける言葉が見つからない叔牙は気の毒そうに呟いた。
しかし、俯けていた顔をゆっくりと上げた辟方の唇は面白そうに弧を描いていた。

「ここまでくると面白いな」
「は？」
「うむ、そうだ。よく考えると面白い。そこまで言うのなら期待に応えてやらねば。それに、そんな娘ならば当分は退屈せずに済みそうだ」

その意見には全く賛同出来なかった。しかし、懸命にも叔牙はそれを表には出さずに苦笑する。

その一方で、すっかり褒？に興味を持ってしまった辟方を、夷吾が複雑そうな顔で眺めていた。だが、すぐに気を取り直したのか、満足そうににこにこと笑う。
そんな夷吾の様子に、二人は全く気付かなかった。

幕間　突きつけられた条件２（後書き）

父様、ナイス親馬鹿です！　流石ですよ！

ずっとこの親馬鹿具合を書きたかったんです。

垂れ流せてよかった～

そして。

可哀想な旦那様はしかしこれくらいではめげないので応援してやって下さい。

ははは。

報われるのはいつのことだろう……（笑）

民許の賜り

蒼天の空がどこまでも広がっていた。雲一つない空に太陽が燦燦と輝き、人々を祝福している。
その空模様は、まるで今日の儀式を、その中心である二人を天が祝福しているようで、集まった人々は皆期待と喜びに心を震わせていた。

人々の視線の先、玉橙宮円舞台の後方に、手に手を取り合って歩む仲睦まじそうな男女が現れると、人々は示し合わせたように歓声を上げる。
その歓声の大きさに驚いたように足を止めた娘。彼女の異変に気付き、同じように足を止めて娘を振り返り、微笑んで何かを呟く男。
彼が繋いでいた手とは反対の手で彼女の手を優しく撫でると、二人は再び歩き出した。
そして、円舞台の中央に立つと二人は手を繋いだままそれぞれ片手を上げて人々の歓声に応える。

花嫁としてやって来た娘の初々しいその姿に。

娘を優しく気遣い、導く男のその姿に。

何より二人が仲睦まじく寄り添うその姿に。

人々は明るい未来を予感させた。
自分たちの歓声に応えてくれた二人の姿に、自分たちの声が届いているという現実に、喜び勇む人々は再び歓声を上げる。
その合唱はまるで地面を揺らすようで、空を突き抜けて天にも届くだろうと人々が感じるほどだった。

＊＊＊

「すごい、ね」

パチパチと目を瞬(しばた)かせる。
褒(ほうじ)?は実感していた。これがこの国の民なのだと。皇帝である辟方(へきほう)が、そしてこれから皇后として褒?が背負っていく生命(いのち)たち。

知識として知っているのと、実際の現実としての実感は別物だ。
目の前に広がる人の海。彼ら上げる声は紛れもなく希望と喜びに満ちていた。
それは皇家への期待と信頼の証だ。

褒?の身体に震えが走って思わず足を止めてしまう。漸く実感した国という重み、それは今まで感じたことのないほどの重責で、精神(こころ)も身体も萎縮してしまい竦みあがっていた。

褒?を掴んでいる手が後ろに引っ張られ、辟方は一歩先に進んだ所で立ち止まる。彼女が立ち止まったために手を後に引かれたことに気付いた辟方は、後ろを振り返ると目を丸くした。
彼の視線の先には、見たことのない表情(かお)をして自分を見上げる褒?の姿があった。よく見ると、褒?の瞳が困惑と不安と恐怖に揺れて潤んでいる。

それは、昨日から辟方に対峙していた褒?からは想像出来ないほど弱々しい姿だった。まるで迷子になった幼子のような彼女の姿に、辟方は場違いながらも彼女を置き去りにして思う存分愛でたくなっ

た。
自分の思考の、彼女を愛でる方向への傾き具合に危機感を覚えつつ、その欲望を理性で抑え付け、辟方は褒？に囁く。

「怖気づいたか？」

挑発するようなその言葉に流石にむっとした褒？が目だけで辟方を睨む。それでもその視線は昨日の射るような圧迫感のあるものではなく、寧ろどこか縋るような眼差しに見えた。

辟方としてはそうやって怖気づく姿には好感が持てる。それを大衆の面前で表に出してしまっている未熟さはあるものの、皇后位に就く恐怖を感じるのは自分のパートナーとして望ましい。
だが、そこで怖気づいて終わるような人間では困るのだ。そんな人間ではこの先共に生きていけない。

もし、褒？がそんな人間ならば、これからの彼女との関係を考え直さなくてはならなくなる。今更この婚姻を白紙には戻せないが、結婚さえしてしまえば彼女をどうにかする方法などいくらでもあるのだから。そう思いながらも褒？を気に入り始めている辟方はまだそれ（・・）を実行する気は全くないのだが。

辟方は一から十まで褒？を助けるつもりはない。だが、この場でこのままという訳にもいかず、取り敢えずは彼女の気を落ち着けるにはどうすればいいかと考えて、ふと彼女の手が小さく震えているのが目に入った。
いや、手だけではない。全身が震えていた。
それを見て、辟方は反射的に繋いでいなかった右手を彼女の手に重ねると、優しく撫でた。

彼の突然の行為に驚いた褒？が辟方を見上げると、思いがけず優しい眼差しで自分を見ている彼に気付いてドキッとする。それと同時に、冷たくなっていた褒？の指先に辟方の指が優しく触れて、まるで彼の熱が移ったかのように温かくなった。
たったそれだけのことで褒？の震えは止まっていた。自分の手を見てそれを確認すると、辟方を見上げてゆっくりと微笑んだ。

自然に笑んだ褒？の顔を見て、辟方は満足そうに微笑み返し、再び前を向いて二人一緒に歩き出す。
そして到着した円舞台の中央で、彼らは割れんばかりの歓声に微笑みながら応えたのだった。

それから三十分。

途切れることのない歓声に、若き皇帝夫妻は終始笑顔で応え続けた。

「――」

背後で名を呼ばれた気がして辟方がちらっと背後を盗み見ると、いつまで経っても戻ってこない二人に焦れたのか、春官が国民には見えない位置から焦ったように手を振っているのが見えた。
その春官に向かって軽く頷くと、握っている褒？の手に少し力を入れてこちらへの注意を促す。

「戻るの？」
「ああ」

前を向いて手を振ったまま小声で聞いてきた褒？はとっくに背後の

春官に気付いていたらしい。確認するように聞かれた問いに、辟方は小さく頷いた。
二人は横目で目を合わせると、円舞台上で国民に優雅に礼をし、再びの歓声が轟く中、円舞台から前室に向かってゆっくりと歩き出した。

「さっきはありがと」

円舞台から充分に遠ざかってから、褒?は辟方を見上げて微笑んだ。まさか自分があの場面で竦んでしまうなど考えてもいなかった。周囲の人間もハラハラしただろうが、その変調に一番驚いたのは褒?自身だ。

儘(まま)ならない自分自身に困惑して頭が真っ白になり、徒(いたずら)に焦るばかり。そんな褒?を落ち着かせてくれたのは辟方の言葉だ。彼の言葉が褒?を正気に戻し、そして彼の温もりが褒?に勇気を与えてくれた。それを思い出すと自然と褒?の胸がほっこりと温まり、笑みが浮かんでくる。

辟方はその花のような笑みに思わず見惚れた。鼓動が速くなっていくのが分かって無意識に焦ってしまう。
空回る思考のせいで彼女の言葉に何と答えていいのか分からず、辟方はぎこちなく頷いて応えた。

それを見てにっこりと笑った褒?は再び前を向いて歩き出す。

辟方は褒?の隣を歩きながら、その笑顔を見て円舞台前で見た彼女の笑みを思い出した。それはまるで固い蕾がゆっくりと花開く瞬間を見ているかのようだった。

普段の彼女は特別美しいと言える容姿をしていない。漆黒の髪と瞳は珍しいが、どちらかと言えば十人並みと称されるだろう平凡な顔立ちをしている。
しかし、先ほど鮮やかに微笑んだ彼女はとても魅力的だった。自然と目が惹き付けられ、はっきりと彼の心に刻み付いた笑み。
それを思うだけで何とも言えない疼きが彼の内に生まれて、苦笑する。

「こんなつもりじゃなかったんだがな……」

辟方の呟きは歓声に掻き消されて、誰に届くことなくただ風に攫われていった。

そんな二人を前室から温かく見守る三つの影。
「素敵……！　とってもお似合いですわ！　ていうか、小瑛様！　何ですかあれ！　皇后様初々しくてすっごい可愛いんですけどっ！！」
興奮し過ぎて自分の上司でもある小瑛の肩をバシバシと叩きながら、頬を染めてキラキラと二人を見つめる梅瑛。
流石に興奮し過ぎている彼女に呆れて、小瑛が鋭く窘(たしな)める。
その横で叔牙は二人を見つめたまま静かに微笑んでいた。

民許の賜り（後書き）

※辟方はロリコンではありません。（笑
文章を読み返すとこれ、ロリコンにも取れるなぁ……と改めて気付きました。
そういう嗜好は持っていませんので期待しては駄目です。
非常に残念ながら応えられません。

えー、今回ちょっと物足りない感じになってしまってすみません。
私も書いていて物足りなかったです。
とは言え儀式についてはこれ以上掘り下げる必要はないし、二人の関係もここではこれ以上進む予定はないので我慢ス……。

移動

茜国(せんこく)皇家の婚姻の儀は三日に亘って執り行われ、その三日の間に花嫁は自国の民と近隣諸国に大々的に披露される。

一日目は近隣の有力者への披露目が、二日目は国民への披露目、三日目は国の官吏たちへの披露目が行われるのだが、その中で最も大変なのが二日目であった。

何故ならその日の行動が儀式によって定められているため、誰もが皇帝と皇后の動きを知っているのだ。

しかも、大宗廟へ詣(もう)でる参詣の儀では皇帝と花嫁、その護衛たちから成る参詣行列は必ず大通りを通ることが決まっている。

そのために万全の警備体制が敷かれるのだが、それでも総ての害意を防げるわけではない。事実、何代か前の皇帝の時代に、二日目の参詣の儀の移動中に暗殺された花嫁がいるほどだ。

だからこそ二日目の移動時には殆どの花嫁が怯えてしまい、壁がなく周囲から丸見えの輿ではなく、しっかりとした壁がある車での移動を花嫁が希望する。その上王宮の外に出ること自体を渋ったり、車から降りるのを嫌がったり、今度は大宗廟から帰ることを拒んだりと花嫁が怖がって問題を起こすことが多かった。

それ故にいつも以上にピリピリとしていた、参詣行列の警備担当である禁軍第一軍――通称“近衛隊”――の面々の口が呆けたようにぽかんと開いていた。

「だから私は輿で行くと言っている」

「し、しかし……」

「何を揉めている？」

褒(ほうじ)?が目を据わらせて男と言い合っていると声が掛かる。振り返ると、叔牙(しゅくが)と知らない大男を連れた辟方(へきほう)が歩いてくるのが見えた。

＊＊＊

先ほど、円舞台から前室に戻った褒?と辟方は、次の参詣の儀の準備のために別行動になった。
あまり時間がないらしく、辟方が叔牙を連れて慌しく出て行くのを見送ると、褒?も小瑛(しょうえい)、梅瑛(ばいえい)と共に前室を後にした。
それから、自分の室(へや)に戻ると素早く羽織を着せられ、頭に薄布の付いた冠を付けられる。

「これ透けているけど、この薄布って必要なの?」
「はい。皇后様のご尊顔を直接拝謁するのは恐れ多いことですから」
薄布を片手で掴みながら褒?が尋ねると、小瑛が丁寧に答えてくれた。
しかしその理屈に納得がいかない褒?は眉を寄せる。

「その理屈はよく分からない」
「ふふふ。ならばこれも儀式のしきたりとお考え下さい」
素直に言葉を返す褒?の様子が微笑ましく、小瑛は悪戯を教えるように言った。
その言葉に「そんなものなのか」と呟く彼女に小瑛の笑みが深くなる。

「では皇后様」
「うん。行きましょう」
小瑛が呼びかけると、すぐに顔を引き締めた褒？は小さく首肯し、小瑛の後ろに立って歩き出す。
その後姿を、参詣にはついて行けない梅瑛が頭を下げて見送った。
そして辿り着いた王宮玄関前には青毛の馬に繋がれた豪奢な朱い車が待っていた。
褒？はその車を見て足を止める。
足を止めた彼女に気付いた小瑛が褒？を振り返り問いかけた。
「皇后様、如何致しました？」
しかしその問いに一向に答えない彼女に小瑛は不審そうに眉を寄せる。
すると、皇后の姿に気付いた近衛隊の一人が足早に近づいて来た。
怪訝そうに褒？の姿を見た後、隣にいる小瑛に説明を求めて視線を向ける。
「……何故車が用意されているの？」
漸く口を開いた褒？の言葉に小瑛と男は目を見開いた。
＊＊＊
それから褒？と男は辟方が来るまで延々と言い争っていた訳だが、

二人は辟方の姿を認めると同時に声を上げた。

「陛下」

「辟方！　君からも言って」

「ん？」

二人の――というよりも褒？の剣幕に驚きつつ辟方が話を促すと、男が口を開くよりも先に褒？が口早に言い募った。

「妖獣は駄目、馬も駄目、輿も駄目。この人駄目としか言わないのよ！」

忌々しそうに訴える褒？の言葉は意味不明だ。余程怒っているらしく、圧倒的に言葉が足りない。

しかし、状況から鑑（かんが）みて大宗廟への移動手段について言っているらしいと辟方はあたりをつける。

「ふむ。車の何が不満なんだ？」

辟方は今回の移動は安全性の高い車でと考えていた。だからこそ車を用意させたのだが、それを褒？が何故不満に思うのかが分からなかった。

「当たり前でしょう！　折角襲撃出来る機会（チャンス）なのよ？　車に乗ってどうするのよ！」

「……」

褒？の言葉に周囲にいた人間が唖然と目と口を見開いた。

彼女の可笑しな発言に空間が凍りついていた。

それもその筈である。

襲撃される側の褒？が、瞳を爛々と輝かせてその機会（チャンス）を好機として語るなどと誰が思うだろう――？

しかし、逸（いち）早く立ち直った辟方は既視感を感じて苦笑を浮かべた。
その光景は正（まさ）しく昨夜の再現である。

どうやら彼女の強者に会いたいという欲望は本物らしい。
いや、どちらかと言うと戦闘出来る機会を逃したくないだけのようにも見えるが。

しかし、褒？と言い争っていた男には気の毒なことをしてしまったようだ。
彼女の安全を最優先に考慮したにも関わらず、その相手に文句を付けられたのだから堪ったものではないだろう。その上、その相手が自国の后では反論も出来まい。
男の泣きそうな表情と額にびっしりと浮いた汗――冷や汗だろう――が何とも言えず哀れだった。

兎にも角にも、褒？は車での移動を断固拒否しているようだ。
しかし、警備配置は勿論のこと、兵士たちにも車での移動を前提とした警備を言い渡してある。
それをこの土壇場で変えるとなれば、兵士たちの間に少なからず動揺を招くだろう。そうして生まれた隙を突かれて、本当に襲撃されては目も当てられない。もしそうなれば、国民に軍への不信感を植え付けてしまいかねないのだ。
ここは褒？には悪いが、我慢して車で移動するよう説得するしかない。

辟方が考え込んでいる一方で、褒？は腹立っていた。
こちらの言い分を聞いた筈なのに、何かを考え込んでいる辟方は難

しい顔をしたまま黙っている。
いくら鈍い褒？とて、その表情（かお）を見れば何を考えているのかは分かる。分かるからこそ腹が立った。

辟方は明らかに車で移動させる気だ。頭ごなしに安全性を説いて反対するだけ。
昨夜、自分の実力の一部を見たはずなのに、辟方は褒？の力を理解していないらしい。まるでお前は無力だ、と言われているようで、そのことが何よりも腹立たしくて仕方なかった。

もし、この場にいるのが父である夷吾ならば、褒？の力を信じて任せてくれただろう。だのに何故辟方は信じないのか、そう考えるだけで無性に苛々する。

「いいではありませんか」

そこにやけに力強い声が響く。
その低い声の主を探すと、そこには辟方と共にやって来た大男がいた。茜国でよく見られる茶色の髪と瞳をした彼は、筋骨隆々の身体に武具を身につけ、だらけたように立ちながらもそこには一切の隙もない。

そこから窺える彼の実力と堂々としたその体躯（すがた）に、褒？は先ほどまでの苛立ちを瞬時に忘れて見惚（……）れた。その視線に確かな羨望と尊敬の念を込めて。
そんな褒？の様子に気付いた辟方は、ムッとして顔を顰める。しかし、大男を無心に見つめる褒？が彼の様子に気付くことはなかった。

移動（後書き）

※文章中の“車”とは、自動車のことではなく馬車のことを指します。

中途半端な所で切ってすみません～

続き、早く更新出来るよう頑張りまーす

上将軍

「管后様、お初に御目にかかる。小官は禁軍上将軍を任されております林項燕と申します。以後お見知りおきを」

一歩前に出て立礼をした項燕の動きには優雅さはなかったものの、力強さと頼もしさが感じられた。

漢らしいがっちりとした筋肉に馴染んだ仕草に、内心で大歓声を上げつつ熱狂してしまう。

（何て素敵な筋肉！　こんな素敵な筋肉に出会ったのは二度目だわ！　あの背中に飛びついてあの素敵な上腕二頭筋に頬擦りしたいぃ～～っ！！）

褒？としては、飛びついて撫で回して擦り擦りして質問攻めにしつつ、手合わせを願い出たいところであった。だが、タイミング良く聞こえた叔牙の空咳で現状を思い出す。

冷静になり、衆目に晒されている中ですべき言動ではないことに思い至った褒？は、内心、ガッカリしつつもにこやかに笑って項燕に頷き返した。

「林上将、こちらこそ宜しく頼みます」

「承知致しました」

褒？の返礼に、にかっと漢らしく笑った項燕は、思わず興奮してしまうほど素敵で、褒？はキラキラした眼差しを一心に注ぐ。

そこに不機嫌そうな顔をした辟方が割って入ってきた。

「項燕、勝手なことを言うな」

「おや、陛下。何がいかんのです？」
「部下が動揺するだろうが」
呆れたように言いつつも真剣な眼差しで見つめてくる辟方を、項燕は軽く笑い飛ばした。
「はっ！　そんなことで動揺するような軟弱者はいませんよ」
「……そうでもなさそうだが？」
項燕の台詞を聞いた途端、周りの兵士たちが一瞬にして静かになった。項燕の姿を視界に入れないように目を逸らす者や顔を引き攣らせる者、汗をかいている者らがあちこちに見える。
そんな部下の様子に気付きながらも、項燕はきっぱりと言い切った。笑顔で。
「護衛対象である皇后様よりも軟弱な者がいたら、そこは責任を持って地獄を見せますよ」
ひぃっという情けない悲鳴がちらほらと上がる。入り口の方に立つ兵士など、顔色が青を通り越して白くなりながら、尋常じゃない量の汗をかいているのが見えた。
気の毒過ぎるその姿に憐れみを誘われた。とは言え、細かい所まで口を出すのは辟方の方針ではない。仕方なく釘を刺すに留(とど)める。
「はぁ……項燕。兵士を使い物にならなくされると困るのだが？」
「任せて下さい」
そう言いながら「わはは」と豪快に笑う項燕は見るからにやる気満々で、辟方の釘などでは止められそうになかった。
二人の話が少々脱線していた所に叔牙から声を掛けられた。いつの

間にか少し離れていた彼は、穏やかに笑いながら歩み寄って来る。
「陛下、皇后様のお望みですし、構わないのでは？」
「叔牙？」
「元々、参詣での移動は輿で行うものですし」
いぶかしむ辟方に、話しながら彼に歩み寄った叔牙は声を潜めて報告した。
「夷吾（いご）殿からの報告です。車には揮発性の毒物が塗布されています」
「！！」
「祭祀用の大輿は密閉空間ではないので同じ心配はありません。大輿を夷吾殿が調査した結果、細工された様子はないと只今報告がありました」
周囲にいた兵士たちには聞こえなかったようだが、すぐ近くにいた褒？と項燕には聞こえたらしい。項燕はにやりと不敵に笑い、褒？は喜色満面の笑顔を浮かべた。
そこで喜ぶのは間違っているだろうと辟方は叫びたい気持ちをため息として吐き出す。
「分かった。大輿を用意しろ」
「直ちに」
辟方の命令に叔牙が頭を下げて、後ろに控えていた文官に伝令を伝える。伝令を聞いた文官は一礼するとそそくさと奥へと消えていった。
それを見届けてから叔牙が再び声をかけてきた。
「陛下。陛下は皇后様とお話になって下さい」

「は？」
「あんなに興奮していては何をしでかすか分かりません」
ちらっと辟方の後方にいる褒？を窺いつつ、にっこり笑いながら呟いた言葉はかなり失礼だった。
しかし辟方はその言葉を訂正することなく、厭そうに顔を顰める。
「俺にアレを宥めろと？」
「貴方の妻でしょう？」
「……はぁ」
笑顔で突きつけられた事実に泣きたくなってきた。なんだか褒？の夫と言うより、保護者か飼い主な気分だ。
辟方は少し肩を落としつつ、褒？の元へ歩いて行く。
叔牙がそんな主の後姿を眺めていると、まだそこにいた項燕が歩み寄ってきた。
「面白い姫さんだな」
「興味がなかったのでは？」
「興味出た」
項燕の言葉に思わず叔牙が顔を上げて項燕を見上げると、彼はにやり笑いかけた。
叔牙は瞳を細めて真偽を見極めようとする。
「何故です？」
「あんな期待に満ちた瞳で見つめられたらねぇ？　俺に何を期待したのか知りたくなるってもんよ。
しかも、それを見た陛下はムッとしてるし、ありゃ絶対面白くなるぜ？」

顎に手を当てながらにやにやとにやける項燕の問いには賛成出来なかった。と言うか、したくない。

「貴方は引っ掻き回すだけですから、性質(たち)が悪いんですよ……」

「あの二人が心からくっつくのは悪くないだろ？」

「それは構いませんが……」

言い渋る叔牙は、しかしこの件に項燕が関わるのを断固として拒否したかった。

（そもそも貴方と褒(かのじょ)？は気が合いそうだから会わせたくないというのに。この二人に好き勝手に暴れられたら止められる者がいなくなるでしょうが……）

そんな叔牙の気苦労を項燕はもちろん誰も知る由はなかった。

叔牙が内心で深々とため息をついている頃。

褒？が未だ見ぬ襲撃者に思いを馳せていると、辟方が声を掛けてきた。

「褒？、少し落ち着け」

「……何ですか？」

水を差された褒？はあからさまにむっとする。

そんな褒？のぶっ飛び具合に顔を引き攣らせながら、辟方は上から言い聞かせるように見下ろした。

「いいから聞け」

そこに昨夜感じた冷気を感じて、渋々辟方に向き直る。

「喜んでいる所悪いが、お前は戦えないだろう？」

「何故ですか？」

「武器を持っていないだろうが」

「持っていますよ？」

予想外の返答に辟方は目を見開いた。

「そんな報告は受けていない！」

苛々してきた褒？は叫んだ辟方を馬鹿にするように見つめながら、淡々と言い返す。

「武器の４つ５つ、誰にも気付かれずに隠すくらい簡単です」

「そんなわけあるか！」

「良い女の嗜みです」

「勘違いだ！　どこでそんな間違った知識を教えられた？！」

「母様が言っていました」

忌々しそうに舌打ちをする辟方に、褒？の苛々が更に積もる。

「ちっ！　これだから管一族はっ！　お前の母が間違っているんだ！」

「父様も頷いていました」

「お前の両親が間違っているんだ！」

「私はそうは思いません。陛下が間違っておられるのでは？」

家族を悪く言った相手に優しくするほど褒？はお人好しではない。

辟方思いっきり冷めた瞳で見返すと、彼は苛々と叫んだ。

「ああ言えばこう言いやがって……！」

それはこちらの科白だ、と褒？は内心で毒づいた。自分の非を認めようとしないなんて狭量な男だな、と彼に対するなけなしの好感度が一気に下落していく。

二人はお互いに顔を背けて視界からその姿を消すと、用意が調った旨を告げに叔牙が声を掛けるまで、お互いに一歩離れた場所に立ったまま苛立ちをぶつけ合っていた。

上将軍（後書き）

あれ？　何故だろう？
イチャイチャからどんどん遠ざかっていく……。

自分の一目惚れを信じられない性質のせいで、予定より遠回りしそうです。
きっかけとしては信じるんだけどね。うん。

招かざる訪問者

そんな騒ぎが王宮内で起きている中、外の王宮前広場では国軍の王都警備隊が広場に集まった国民の誘導を行っていた。この後、王宮から出てくる参詣行列が通るための道を作り、そこに何か異常がないか点検するために広場にいた人間を散らしている。

元々王都にいる人間などは、勝手が分かっているために速やかに協力してくれるが、流石に皇帝の婚姻という嘉礼だけあって観光客なども多く、作業が捗(はかど)らずに遅れていた。

そんな騒がしい王宮前広場で、じっと佇んだまま皇帝夫妻の姿が消えた円舞台の奥を見ている男がいた。

人々を誘導していた兵士の一人がその男に気付き、声を掛ける。

「すみませ～ん」

「あ、はい」

声を掛けられた男が兵士の方を向くと、人の良さそうな顔をした兵士が眉尻を下げながらひょこっと頭を下げた。

「これからここ、参詣行列が通るんですよ～。お手数ですけど移動してもらいたいんです～」

「ああ、そうなんですか？　では、邪魔をしてしまいましたね。すみませんでした」

心底申し訳なさそうに言った男に兵士は頭を掻きつつ笑う。

「いえいえ～。こっちの都合ですから～。こちらこそご協力感謝します」

またまたひょこっと頭を下げた兵士に「わざわざありがとうございます」と返して、一歩踏み出した男は、しかしすぐに兵士を振り返った。

「あの、この後の行列って何処なら見えますか？」

「行列ですか～？　今からだと大通りは既に人で溢れ返ってるから難しいですね～」

「そうですか」

兵士の言葉を聞いて考え込んでしまった男を見かねて、兵士は又聞きの情報を教える。

「ああ、でも大宗廟の近くなら見れるかもしれませんよ～？　皆大通りで行列を見るのであっちには人が少ないとか」

「そうなんですか？　ありがとうございます。それならそっちに行ってみます」

「ああでもそっちは警備の――ってあれ～？」

兵士が注意をしようとすると、男は既に立ち去った後で人ごみに紛れてしまっていた。それを見て「あちゃ～」と頭を掻いた兵士は、しかしすぐに背後から「師帥（しすい）ー！　どこっすかー？」と自分を呼ぶ声が聞こえて「まぁいいか～」と呟くと再び誘導作業に戻っていく。

と、その途中で見知った人を見つけて声を掛けた。

「あれ～？　見に来てたんですか～？」

「当たり前じゃない。私の可愛い子の晴れ舞台なのよ？　それより、

師帥ともあろう人が何故人民誘導なんてやっているの？」
「そうですか～。まぁどうでもいいんですけどね～。あ、俺は司令部から将軍に叩き出されまして～」
そこまで言ったところで兵士は彼女の笑顔が変わったことに気付いた。その笑みは、周囲の温度を下げることなく此方の背筋だけを凍らせていく。
「どうでもいいってどういうこと？　その腐った脳みそ潰しましょうか？」
「あはは～、遠慮しますよ～」
しかし、その兵士はそんな冷気に怯むような人間ではなかった。先ほどまでと同じように笑いながら、手をぞんざいに振って拒否した兵士は、というか俺の叩き出された話は無視（スルー）ですか～？　と問いかける。もっとも、彼女には彼の科白諸共綺麗さっぱり無視されたが。
「まぁ、いいわ。ちょうど良かったし。……何か変わったことはなかった？」
にっこり笑ってもう一度威嚇した彼女は、後半笑みを消して真剣な眼差しで尋ねた。
そんな彼女に対して、兵士は一度だけ笑みを消すと、またへらへら笑いながら軽く答える。
「皇帝夫婦の観察者はちらほらいましたね～。ただその中に見慣れぬ旅人が一人、謀とか暗躍が好きそうな感じの人がいましたよ～。あ、近くにはいませんでしたがお仲間がいるようで～」
「そう。その旅人は？」
「大宗廟の方は人がいないので参詣行列見れますよ～って教えたら、

そっち行くって言ってました～。ただ最後まで話を聞いてくれなくて、『そっちは警備の人間しかいませんよ～』って言いそびれてしまって～」

兵士は頭の後ろを掻きながら、どうしましょう～？　と笑った。何とも胡散臭いその姿に彼女は胡乱な目を向け低い声で訊ねる。

「……貴方、わざとでしょう？」

「大丈夫でしょ～？　行列には近衛隊いるし、正直彼女一人でも問題ないと思うけど～？」

片手を上下にひらひらさせて軽く言う兵士に、彼女は眉を寄せた。彼をしっかりと睨みつけてから、顎に軽く手を当てて呟く。

「でも、あの子も万能じゃないのよ？　まだまだ子供だし……」

「そりゃそうでしょうけど～。……って、あれ～？　彼女もう22歳じゃなかったっけ～？」

「そうなんだけどね……はぁ。あの子、人の悪意とか害意に鈍感だから……人間は欲望で国すら殺すというのに、そんなことになるとは露ほども思っていないのよ……大丈夫かしら？」

彼女は悩ましげなため息をつくと、ぶつぶつと子煩悩なことを言い始める。

彼女の呟く内容が内容なだけに流石の兵士も顔を引き攣らせた。

「というか、国すら殺すとか簡単に言わないでくれませんか～？貴女が言うと生々しくて洒落にならないんですけど～」

「当たり前でしょう？　事実なんだから。……ああ、やっぱり心配だから大宗廟の方に行ってみようかしら？」

「見つからないようにして下さいよ～？」

誰に言っているのかしら？　と彼女が剣呑な顔で聞くとすぐに貴女ですよ～、と暢気な答えが返ってきた。本当に食えない男である。しかしすぐに思考があの子のことに戻ると、彼女の顔に笑みが浮かんだ。

「ふふふ。人知れず陰で暗躍してあの子を守る……こういうのもすごく楽しいわね。これからもやろうかしら？」

明らかに本気の眼をしている彼女に、兵士の男はうんざりする。

「そういうのは夫君に相談してからやって下さいよ～？」

「嫌よ。それじゃあ面白くないもの。……それに、あの人だったらすぐに気付くわ」

言外に、彼は優秀なのよ？　と夫の自慢兼惚気る彼女に、

「はいはい」

と兵士は適当な相槌を打った。

「あまり大事にしないで下さいよ～、三娘様？」

小声で低く忠告すると、彼は今度こそ自分を呼んでいる部下の下へ向かった。

＊＊＊

一方、人ごみに紛れた男が流れに乗って歩いていると、後ろから小柄な青年が近寄って来る。

「花嫁はどうだった？」

問いながら男の横に並んだ青年は目を細めて彼を見上げた。

「思っていたのとは違ったな」

「ああ、なんか素直そうだったね」

「……まぁ、父親とも母親とも違うようだな」

前を向いたまま男は唇を吊り上げる。その笑みに隠された好奇心と少しの苛立ちを見つけた青年はにやりと笑った。

「何？　その含みのある言い方は」

「あれだけでそう判断するほど馬鹿じゃない」

青年を見下した男の視線には多分に嘲りの感情が含まれていた。それを見咎めた青年は声を上げて憤慨する。

「うわー、馬鹿にされた！」

「これ位は気付くか」

「荘」

「ふっ。まぁこれからだ、宝。管家の警備を掻い潜って情報を得ることは難しいが、王宮ならどうとでもなる」

低く名を呼んで非難した青年を男は軽く笑って流した。そして漸く顔を青年に向けた男は、彼の名を呼ぶとふてぶてしく嗤った。

青年は肩を竦めて答える。

「王宮ってのは何処も隙があるからな」
「ああ」
「と言うかあれは管家の方がおかしいんだ。ただの娘なのにそこらの皇族より警備が厳しいってどういうことだよ」
手を頭の後ろで組んで歩きながら非難した青年に、再び前を向いた男が片頬を上げて笑った。
「ただの娘ならば、な」
「何かあるのか？」
「さぁな。あの娘に関して分かっているのはあれが養子で夜郎ではないことだけだ」
男の答えを聞いて眉を寄せて唸った青年は、男の顔を見上げて再び問うた。
「養子ってのは分かるけど、本当に夜郎じゃないのか？　真っ黒の髪と眼なんだろ？」
「ああ」
「そこも何かあるってことか？」
「恐らくな」
「それもこれからってことか……。んで？　これからどうする？」
素っ気ない男の返答にこれ以上聞き出すのを諦めた青年は、前を向いて横目で男を見ながら軽く聞く。
「もう少し付き合え」
「何する気だよ？」
立ち止まって訝しんだ青年に、男は振り返って嗤った。

「ふっ。ちょっとした挨拶だ」

招かざる訪問者（後書き）

新たな人物の登場です。
本当はこんなに長くする予定なかったんですが、何故か1話分に……
おちゃめな彼女が出てきたせいっすね。
そんな彼女、大好きですが（笑）

次話から漸く暗躍する者たちが表で本格的に動き出します。
そこからは丁寧に書きつつもなるべくテンポよくいくようにしていきます。
と言うか、どちらかというとテンポの方を大事に書いていくので、
書き漏れが出そうですがそこは小話や後からの編集で書き足したりして何とかしていきます。
私のスペックが低いので書き漏れはきっと起こります。気をつけますが。

どうぞ宜しく〜

参詣行列（前書き）

面倒なのでタイトルに二日目を付けるのを止めました。

参詣行列

茜国栄州上涼――

茜国の皇都であるこの街は、高い外壁に囲まれ、街の中央に大きな通りが十字に走っている。街の北にある王宮と、南にある街道へと繋がる外門とを結ぶ、南北に走る大通りを橙道、街の東にある大宗廟と、西にある涼湖に面する港とを結ぶ、東西に走る大通りを涼宗道と呼び、この大通りに区切られた街の四区画をそれぞれの特徴に合わせて、北東は貴区、北西は上区、南東は平区、南西は花区と呼ばれている。

これから皇帝たちの参詣行列が通るのが、この橙道の北部から涼宗道の東部にかけてで、その通りに沿って一目でも参詣行列を見ようと、多くの人々が集まって皇帝と花嫁の登場を今か今かと待っていた。

街中が期待に満ち溢れる中、ギギギと鈍い音を上げながらゆっくりと宮門が開き、王宮内からゆっくりと参詣行列が進んでくる。

先頭に騎馬に乗った近衛隊兵士が二列に並び、その後ろから二列に並んだ歩兵が、山生馬（さんせいば）と呼ばれる妖獣二匹が牽く大輿とその上に乗る皇帝、花嫁、そして大輿を囲むように左右に歩兵が続き、再び二列に並んだ歩兵、騎馬兵の行列は瞬く間に民衆の歓声に包まれた。

近衛隊の武装した姿は物々しいものの、騎馬兵の持つ朱の国旗や華麗な装飾の施された大輿は見事で、それだけで行列の雰囲気を華やかに彩っていた。

見た目だけは。

「おい！　聞いているのか？！」

辟方（へきほう）と手を繋ぎ、笑顔で手を振っている外面とは裏腹に、褒（ほうじ）？の内心はやさぐれていた。

辟方は実に皇帝らしく、褒？が自分の意見を聞き入れることを当たり前だと思い、ただただその意志を押し付けている。

自分も同じことをしているのは棚に上げて、褒？は辟方の態度に腹を立てていた。

（さっきからただ押し付けるだけじゃない！……あ、それは私も一緒か。……いや！　でも、この、問題を起こす子供に面倒だが仕方なく注意をする近所の兄（あん）ちゃん、みたいな態度がムカつくのよ！　私の方が年上なのにぃ～っ！！）

考えている内に益々腹が立った褒？の手にぎゅうっと力が入る。

「っ！！　お、おい！　痛い、んだが……」

手の痛みに思わず顔を顰め、抗議しようとした辟方だったが、褒？の笑顔を見てその声が小さく消えていく。

変わりに背中を冷や汗が流れ、口元が引き攣った。

「陛下」

「なっ、なんだ……？」

地獄の底から響く声のように聞こえて、辟方は内心後退りしつつも何とか返事を返す。

「最初に言っておくけど、襲撃があったら私は戦うからね」
褒？がそう断言すると、彼女の様子を窺っていた辟方が眉を寄せてため息をついた。
「何度言えば分かるんだ？　お前は大人しく守られるのが仕事だ」
「そっちこそ何度言えば分かるの？　私が戦うことを止められはしない」
微笑み、民衆へと手を振りながらの舌戦ははっきり言って異常だった。
二人の会話が聞こえている可哀想な近衛隊兵士たちは、その恐ろしさに青くなっている。行進前の上将の宣言といい、輿上の血気盛んな皇后といい何故こうも精神衛生上良くない――と言うか、もう迷惑でしかない人間たちが自分の上官なのだろうか？
兵士たちは周囲を警戒しながらもそんな精神的な重圧に耐えていた。
まぁ、それでも上将や幹部たちは全く表情が変わっていなかったが。
そんな周囲の様子に気付くことなく辟方は言葉を重ねる。
「お前は兵たちの仕事を失くす気か？」
「護衛は拒んでない」
「お前が戦ってもし怪我をすれば、責任を取るのは護衛している兵たちなんだぞ？」
「そこは君が上手くやればいい」
「あのなぁ……。そもそもそんなことをしたら民に示しがつかん」
重々しいため息と共に吐き出された言葉に褒？は笑ってしまう。彼の口からそんな殊勝な言葉が出るとは思わなかった。

それに、今更な話だ。

「君こそ解ってない。“紅嵐の惨劇”を乗り越えた現在（いま）の国民たちがそれくらいでどうこうなる訳がないでしょ」

「……」

「だからこそ外見に問題のある私でも皇后に成り得た」

違う？　と言われて辟方は黙する。

苦虫を噛み潰したような顔をしている辟方に、褒？は流石にやり過ぎたことに気付く。別に辟方を叩き潰したいわけではなく、ただ戦うことを認めさせたいだけであることを思い出し、コホンと空咳をすると、やや口早に言葉を継いだ。

「それにこういうのは初めが肝心なのよ。ナメられたら終わりと母様が言っていた」

「誰がナメるんだよ……」

後に付け加えられた科白に辟方は思わず脱力してしまう。

そんな彼に褒？はにやりと笑ってみせる。

「もちろん野心溢れるお馬鹿さん」

「お前が言うと子供の遊（いたずら）びに聞こえるな」

苦笑した辟方に不機嫌気味に突っ込もうとして、しかし褒？は視界の端に捕らえたモノを見て口元が緩んだ。

思わず微笑んでしまった褒？は、そのままいそいそと本題に戻る。

「追跡は兵に任せるんだから迎撃は譲れない」

「結局は振り出しに戻るのか」

「どっちにしろ君の負け」
「あ？」
「時間切れ。……来た！」
褒？が先ほど視界の端に捕らえたのは路地裏を動き回る複数の影と建物の屋根に隠れて弓矢を番える者たちだった。路地裏の者たちはすぐに見えなくなってしまったが、屋根に隠れている者たちが矢を引き絞り、放したのを見て褒？は声を上げる。
同時に袖の中に隠し持っていた鉄扇を取り出してすぐに迎撃出来る態勢を整える。周りを見ると近衛隊の上将と幹部たちは既に襲撃者に気付き臨戦態勢に入っていた。
するとこちらへ向かって飛んでいた矢に変化が生じる。チリチリと小さく鳴った後、鏃がぼっと燃えてそれは瞬く間に火矢と化した。
「なるほど。車が狙いだった訳ね」
ぼそっと呟いた褒？は一応周囲を見回してから臨戦態勢を解く。それを見て辟方は首を傾げた。
「どうした？　戦わないのか？」
「やる気が失せた」
「は？」
「だって相手は私の移動法が車から輿に変更になったことを知ることも出来なければ、臨機応変に計画を変更することも出来ない三流なのよ？　そんなの相手にしたって何にも面白くなんてないわ」
「本当に勝手な奴だな……」
「勝手で結構！　……それに仕方ないのよ。母様たちの必死の結果なんだから」

呆れたように言葉を吐き出した辟方に褒？は困ったように笑った。
その寂しそうな横顔に辟方は不可解そうに眉を寄せる。しかし、彼の様子に気付きながらも褒？は口を噤んで周囲を見回すだけだった。

そうやって二人が暢気に話している間も、周囲は喧騒と戦闘の渦に包まれていた。

項燕は大輿の左側で飛んできた火矢を剣圧で吹き飛ばし、右側では師帥や旅帥といった近衛隊の幹部連が剣や礫で火矢を弾く。
その隙に人ごみの中からわらわらと武器を持った襲撃者たちが湧いて出て来て大輿を取り囲んだ。すぐさま近衛隊の兵たちは抜刀し、その中の一人が警笛を鳴らす。

ピィーーーーーーーーーーーー

突然の襲撃に呆然としていた民衆は、甲高い警笛の音で我に返り、各々（おのおの）戦闘対策に出た。即ち、戦闘の邪魔にならぬように戦闘区域から退避し、大通りに備え付けられている簡易隔壁を展開させる。この街の人間ではない者の誘導も民衆が自主的に行っていた。

それにより王都警備隊は民衆の護りと襲撃者の包囲に集中している。
結果、襲撃者は近衛隊と警備隊に挟まれて、その抵抗も虚しく鎮圧されるのは時間の問題となっていた。

だがその時。

「媽媽（マーマ）……？」

小さな呟きが風に乗って響いた。

参詣行列（後書き）

遅くなってすみません～
しかも切る予定になかった所で切ってしまうハメに……

ううう、戦闘好きの褒？の戦闘シーンは一体いつになったら書けるんだろう？

というか、一対一の戦闘シーンも書きづらいですけど、多数対多数の戦闘シーンも書きづらいですね。
初めはこの回の戦闘シーンももっと詳細に書いてたんですけど、あまりにも進まないので障りだけ書いてあっさり終わらせました。
一人一人ピックアップしてしまうとテンポが悪い所じゃなかった。
うん。

不足なく、テンポ良く、というのは難しいですね。

大通りの襲撃（前書き）

戦闘描写があります。
残酷ではないと思いますが、苦手な方は注意して下さい。

大通りの襲撃

幼い子供特有の澄んだ高い声が喧騒の中にあっても確かにその場に響き渡った。

突然の闖入者に気付いていなかった褒？はその声の主を慌てて振り返る。そこに立っていたのは、目を潤ませおどおどと辺りを見回しながら大輿の方へ近寄って来る少年だった。

「どこぉ？　媽媽（マーマ）？　媽媽！」

必死に母親を呼ぶ少年の姿に呆然としたのは一瞬で、すぐに周囲の人間が動き出した。

少年の一番近くにいたのは襲撃者の一人だったが、動き出したのは近衛隊の兵士の方が早かった。そのお陰で襲撃者たちよりも早く少年を保護出来たが、彼は少年を保護した際に出来た隙を突かれて襲撃者に腕を切られてしまう。

しかしすぐに持ち直すと切られた腕とは反対の手に剣を持ち替えて襲撃者と打ち合い始めた。打ち合いの合間に彼は少年に大輿の傍に居るよう指示すると、少年を背後に庇いながら襲撃者と相対し続ける。

周囲の兵士も無事少年が保護されたことに気付き、皆の注意が完全に目の前の襲撃者達に集中した。

その時。

少年が動いた。

褒？はずっと少年を見ていた。

周囲を警戒していたにも関わらず、褒？には少年が何処から出てきたのか分からなかった。
警戒中の自分が迷子の子供の接近に気付かないなんてありえない。
それは、警備の兵士たちにも同様に言えることだ。だが、実際には自分も彼らも少年の接近に気付かなかった。

だからこそ、彼の登場はおかしい。

しかし、近衛隊の兵士も警備隊の兵士も目に見える危険である襲撃者たちを取り押さえることを優先させていた。

（その対応は間違ってないけど、少年を放置するのはなぁ……。まぁ、どの道彼が刺客なら狙いは不意打ちによる奇襲でしょ。それなら私だけでも防げるか……）

そう思い、褒？は只只管（ただひたすら）に少年の奇襲を警戒していた。
そして、周囲の注意が自分から逸れたその一瞬に動いた少年を見て、褒？は唇で弧を描いた。

少年がこちらを狙い投げて来た得物を見て褒？はすぐさま頭の薄布を取り外す。

その得物は、暗器匕首（あんきひしゅ）――。
隠し武器として使われる鍔（つば）のない短刀で、殺傷能力の低い匕首を遠距離攻撃に使う場合、刃に毒が塗布されている事が多い。
それ故に褒？は、右手で辟方の肩を掴んで力を込めて床に押し付ける。

「伏せて！」

戸惑う辟方を強引に床に伏せさせると、褒？は手に持った薄布をひらひらと匕首に纏わり付かせて包（くる）むと、その軌道に合わせてくるりと回転する。
回転によって匕首の推進力をいなしてそれを完全に無効化した褒？の動きを見て、驚きで目を見開いている少年を見据えながら彼女は辟方に声をかけた。

「毒付きだから触らないでね」

そう言うと、布ごと匕首を輿の上に放り投げてすぐさま輿から飛び降りる。
着地の際の衝撃を利用してそのまま地面を強く蹴り、自分を保護した兵士を背後から切り捨てようとしている少年と兵士の間に飛び込んだ。
差し迫る少年の剣を、移動の際に取り出した鉄扇で受け止める。
褒？は少年との鍔迫り合いに全体重を掛けるために両足を上げて飛び上がり少年を地面に押し付けつつ、その足で背後にいる兵士を蹴り飛ばした。兵士は３０ｃｍほど背後に飛んでべちゃっと地面に落

ちる。上手く受身を取れなかったようだ。

兵士を飛ばしたことで体勢を崩している褒？の隙を狙い、少年は鍔迫り合いの力を受け流して更に彼女の体勢を崩すと、片手で短剣を取り出して彼女に突き刺そうと振り上げた。

褒？は体勢を崩された力を敢えて殺さずに、そのまま重力に従って地面に叩き落ちると足を上げて短剣を持つ少年の手を蹴り上げようとする。しかし、手の軌道を変えるだけでその攻撃をいなした少年はそのまま短剣を振り下ろした。

彼女は足を蹴り上げた反動を使ってごろごろと地面を転がってそれを避けると、すぐに立ち上がって少年の懐に飛び込んだ。

褒？を追撃しようとしていた少年は、反転して自分に向かって来た褒？にぎょっとするもすぐさま反応し、低い位置から鉄扇で鳩尾を狙った彼女の一撃を短剣と長剣を交差させて防御、ぶつかった衝撃を使って後に飛び退き、彼女と距離を取った。

すぐに追撃しようとした褒？は、しかしすぐに足を止めて半眼で少年を見やる。

少年は突然止まった褒？の様子を訝しんで警戒した。そこに突如背後に生まれた殺気に気付いた少年は、素早く半身を捻るも迫ってきた剣の峰が鳩尾を強打した。

「っつ！」

衝撃に息が詰まったその隙に、首に手刀が入り少年はそのまま意識を失う。

意識のなくなった少年の身体を片手で受け止めたのは、背後から少年を襲った兵士だった。

「いい所を邪魔しないで欲しいのだけど？」

「これが私の任務ですので」

半眼で睨む褒？の態度をものともせずに返してきたのは優男な近衛隊の兵士で、ふてぶてしいその態度にムカッとした褒？は厭味を飛ばす。

「その割には丁度良い機会を見計らって美味しい所だけ持っていったわね？」

「心外ですね。襲撃者を捕らえ終えたのでこちらに来たまでですよ」

さらりと流した男に、ナメられていると感じた褒？は彼を睨みつけた。

「気付いてないとでも思ってるの？」

「管后様、どうぞ輿へお戻り下さい。すぐに出立致します」

「……いい度胸ね。君、名前は？」

「禁軍第一軍第三分隊旅帥、江龍慶と申します」

「そう。覚えておくわ」

怒った彼女を全く取り合わず淡々としている龍慶に、褒？は内心でこいつ絶対ぶっ飛ばす！　と息巻きつつも、それだけ聞くと後は興味を失ったように踵を返した。

しかし、すぐに立ち止まって後ろを振り返ると龍慶に声を掛ける。

「その子に聞きたい事があるから王宮に戻ったら話しを聞けるようにしておいてくれる？」

「襲撃の背景を問い質すおつもりですか？」

冷たい声で聞き返してきた龍慶に褒？は面くらいながらも彼の問いに答えた。

「それは私の役目ではないもの。別の人間に任せるわ。私が聞きたいのは襲撃とは関係ないことよ」

「そうですか。ですが、私の立場では確約出来ませんが？」

褒？の答えを聞いて声色の戻った龍慶を疑問に思いながら、褒？は自分の考えを告げる。

「構わないわ。私の望みが責任者に伝わればそれでいいのよ」

「承りました」

そう言って頭を下げた龍慶に頷いてから、褒？は今度こそ踵を返して輿へと戻って行った。

頭を上げた彼は褒？の後姿を見つめた後、意識のない少年を肩に担いで事後処理のために彼女とは反対方向に歩いていった。

大通りの襲撃（後書き）

待たせたのに短くてすみません～
戦闘描写、やっぱり難しい。
でも、簡単にさっぱりぽんで終わらせるのもちょっと……
何せ皇后様が戦い大好きですから。

次話の更新はこちらの都合により１３日以降になりそうです。
またもや間が空いてしまいますが、待っていて下さると有難いです。

豹変

（私としたことが……。獲物を横から掠め取られるなんてなんたる不覚！　しかもあのイケメンがっ！！　素敵筋肉（ナイスマッチョ）じゃなかったあぁぁぁーーーーーっっ！！！！！）

内心でグチグチと悪態をつきながら、褒（ほうじ）？は欲求不満になってしまったこの鬱憤を晴らそうと真っ直ぐに辟方（へきほう）の元へと向かう。

すると、いつの間にか大輿から降りていた辟方は、上将軍の項燕（こうえん）に布で包まれた毒付きの匕首（ひしゅ）を渡し、この騒ぎの指示を出しているようだった。

「後は指示通りにしろ」

「分かっとります」

そっと近づいた褒？に気付いた項燕に声を掛けられる。

「管后様、お怪我は？」

「そんなへまはしないわ」

「危険に晒してしまい申し訳ございませんでした」

軽く答えた褒？に項燕は真面目に頭を下げてきた。

その真面目腐った対応に褒？は嫌そうに顔を顰める。

「そういう面倒なことは全部後よ。ここでなくても出来るでしょう？」

「褒？」

項燕の謝罪を受け入れないような態度に、辟方が褒？を窘(たしな)める。
咎める様なその響きに言い方が悪かった自覚のある褒？は、罪悪感を感じ慌てて言い訳を言い募った。

「別に謝罪を受け取らないと言っている訳じゃないわ！　けじめをつけるにしても此処じゃなくてもいいでしょ？」

「管后様の仰(おっしゃ)る通りですな。では陛下、頃合を見て号令はお願いしますよ」

軽く笑って流してくれた項燕に感謝をしつつ、彼の同意を得て「そうそう」と頷くと、辟方は肩を落としてため息を付いた。

「あんまりこれを甘やかしてくれるな」
「ああ、そうでしたな。それは陛下の役ですからな。折角の機会を奪ってしまっては恨まれてしまう。陛下、失礼致しました」
「なっ？！」

思わず絶句した辟方と、そんな彼を見て豪快に笑う項燕。
はっきり言ってマヌケ面を晒している彼の姿を初めて見て、褒？は感心してしまった。

「おおぉ～！　すごいな、林上将！　口だけでも仕留められるのか！」
「わっはっは！　このように褒められるのは存外に嬉しいものですな！」
「そうなの？」
「はい。皆、小官を恨むか呆れるのです」
「恨む必要も呆れる必要もないのにおかしな者たちだね」

「全くですな。……陛下、まだまだですなぁ。しっかりと心を掴まなくては駄目ですぞ？」

前半は真面目に褒？に頷き返していた項燕は、しかし後半、にやにやと厭な笑いを浮かべながら辟方を眺めて忠告をする。それに辟方はすぐさま言い返そうとしたが、周囲の状況を思い出した彼はぐっと言葉を飲み込み、ぷいっとそっぽを向いて項燕を無視した。

簡単にあしらわれている辟方は幼い――と言うよりも子供っぽく、目を丸くして二人を見ていた褒？は思わず笑ってしまった。流石に辟方に悪いと思い、笑い声を抑えようとしたが、くすくすと小さい笑い声がどうしても漏れてしまう。

「くっ、ぁはっ……！　そんな顔も、するんだね、辟方」

褒？は先ほどまで抱えていた不平不満をすっかり忘れるどころか、外にいるために力んでいた余分な力が抜けて、なんの衒いもなく無邪気に笑った。

褒？の素の笑顔はにへらと顔がだらしなく緩んでいて、はっきり言ってときめくものは何もないのだが、その笑顔に辟方ははっと見惚れる。

褒？はやっとのことで笑いの衝動を収めると、自分のことをじっと見ている辟方に気付いた。

「どうしたの？　顔に何か付いてる？」

「っ！　いや！　なんでもない……」

凄い勢いでぶんぶんと首を横に振りつつ、力なく答える辟方を褒？

は不思議そうに眺める。
そんな辟方の初々しい様子と鈍感な褒？の姿に、流石の項燕も苦笑してしまう。

部下に呼ばれた項燕が去り、二人になったところで辟方が口を開いた。

「なぁ……、戦うなとは言わんがせめてもう少し控えてくれないか？」
「突然何？」
「お前に何かあったら困る」
「えっ？」

褒？はドキッとして、どういう意味だろうかと考える。だが、意味が分からない。
そんな褒？の様子に気付いていないのか、辟方は続ける。

「お前は強いんだろう。でも、強者とて絶対ではない。お願いだから毒を仕込むような暗殺（やから）者に向かって行くな」

見たこともない辟方の様子にぱちぱちと瞳を瞬いた。だが、彼は真剣な表情をして褒？の手を掴み、瞳を覗き込んで来る。
口調は変わらず偉そうで命令口調なのに、それを裏切る表情と態度に褒？は訳もなく動揺してしまう。

（いいい一体何がどうなってるの？！　何で？　何で急にこんなんになったのぉっ？！）

内心ですらどもり、狼狽して左右に無駄に視線が泳ぐのを止められない。
一向に答えない褒？に、辟方は掴んでいた手を額に当てて瞳を閉じる。
それから吐息と共に囁いた。
「戦ってくれるな」
願いを込められたその言葉に熱を感じてビクッと身体が震えた。
辟方の突然の変貌にどうすればいいのか分からず、褒？はみっともなくオロオロする。
（どどどどうしたのよー？！　訳が分かんない……）
意味もなく泣きそうになって、眉尻が下がる。
しかも、いつの間にか避難したはずの民衆が遠巻きにこちらを見て、「ほら、やっぱり！」「陛下は皇后様を待ってらしたんだ」「御二人は漸く結ばれたのね」「いや～ん！　アツアツ～！」などというおかしな科白が聞こえてくる。
褒？は更に泣きたくなった。
わいわいと賑わう民衆に、それはどういう意味か問い質したいのにその答えを聞きたくない。思考が回転して、ついでに目も回っている気がした。それなのに顔が熱い。
訳が分からなくて真っ白だか真っ赤だかになっている褒？に、更に追い討ちをかけるように辟方が再び口を開こうとする。
それに気付いた褒？は、顔を真っ赤に染めて半泣きになりながら慌てて叫んだ。

「わ、わかった！　分かったからもう止めてぇ！」
「本当か？」
「ひっ！　ほ、本当！　本当だから！」
嘘を許さないように迫って来た辟方に、何故か恐怖を感じて一歩後ずさる。
だがそこに嘘はないと納得した彼は、ほっと安堵の息を付いてにっこりと笑った。
「そうか。なら戻ろう」
そう言って手を差し出した辟方に、褒？は首を傾げる。
「何？」
「手。危ないだろう？」
「……は？」
いやいや何言ってんだこいつ？　と思いつつ差し出された手をじっと見ていると、焦れた辟方が褒？の手を取ってそのまま繋ぐ。
すると何が嬉しいのか、再びにっこりと辟方が微笑んだ。
そうして、何故か手を繋いで一緒に大輿に戻った。
「褒？が俺の“李華（はな）”だったんだな」
途中、小さく呟かれた辟方の言葉は幸か不幸か褒？の耳には届かなかった。

幕間　結婚前夜

今回の婚姻に関して、皇帝陛下からの文句が出なかったことで、今まで后位問題で頭を悩ませていた官吏たちは俄然やる気を出した。陛下の気が変わることを最も恐れた彼らは、通常の執務をこなしながら異常な速さと熱意で婚姻の儀の準備を終わらせたのだ。

その結果、褒？（ほうじ）が縁談話を父である夷吾（いご）から聞いた2日後には婚姻の公表がなされ、春官の長である大宗伯自らによって占われた吉日により、婚姻発表の1週間後には正式に婚姻の儀が執り行われることとなった。

褒？はそのあまりの素早さに驚きを隠せなかった。

隣国である湯国（とうこく）ほどではないが、それなりに歴史を持つ茜国（せんこく）でも祭事では伝統が重んじられる。皇帝の婚儀ともなれば、それなりの段階を踏まなければならないため、正式な公表から半年から1年ほど掛かるのが通例だった。

幾ら世情に疎い褒？とてそれくらいは知っていたので、婚姻に了承はしたもののかなり暢気に構えていたのだが、どうやら今回ばかりは勝手が違うらしい。どうしてもこの婚儀を成功させたい官吏たちは、“省けるものは最大限省く”を掲げ、最速の婚姻を目指していた。彼らにとって今回に限っては伝統は最低限守られればいいらしい。

まぁ、恐らくは夷吾が率先して官吏たちをせっついているのだろうが。

そんな異様な事態のせいで、褒？は慌しい一週間を過ごした。
後宮に入ってしまえば街に出るどころか、王宮内ですら自由に動けなくなる。何より急な婚姻で、嫁入り道具が全く揃っておらず、花嫁衣裳やら何やらの準備に東奔西走して休まる暇のない日々を過ごしていた。
それを口実にして、褒？は外出しては街や街の外にある森をちゃっかりと遊び歩いてもいたが、此処での追求は止めておこう。
そんな非日常の目まぐるしい時間の中で、褒？は確実に変化していく毎日（とき）を実感していた。
夜が来る度に増す寂寥感に襲われて、夜になってもまともに眠れない日が続く。

そして、婚姻の儀の前日――
管家で過ごす最後の日だけあって夜遅くまで談笑に花を咲かせていたが、人々が帰り、皆が寝静まる時間になると、屋敷はひっそりとした空気に包まれた。
自室の寝台に横になったものの、全く眠れない褒？は寝ることを諦めて部屋を出た。寝静まった屋敷の廊下を、音を立てないように気をつけながら歩いて行く。
中庭に出ると、晴れた夜空に真円を描いた真白い月が輝いていた。
月の光が庭の山吹を優しく照らしているその景観に褒？はなんだか泣きたくなってくる。

「眠れないのかい？」

感傷に浸っていた褒？は夷吾の気配に全く気付かなかった。声を掛けられ、驚いて振り向くと父が笑顔で立っている。

「父様……」

迷子の子供のような顔をしている褒？に夷吾は驚いてしまった。しかし、久しぶりに見た子供らしい幼い顔に愛しさが溢れる。

夷吾は笑顔で褒？の隣に立つと、優しく彼女の頭を撫でた。

父の子ども扱いに反論しようとするが、嬉しいことに変わりはないので、恥ずかしさで赤くなりながらも大人しく頭を撫でられたままにする。

しばらくそうしていると、波立っていた心がだんだんと落ち着いてきた。それでも心に忍び寄ってくる不安を抑えきれず、ぽつりと本音を漏らす。

「私が嫁ぐのにはやっぱり問題があるよ……。相手は皇帝だよ？下手をすればこの国に影響が出かねない……」

「褒？……」

「ねぇ、父様？　私だって自分がどれだけ危ういのか分かっているわ。今まで父様たちが私の知らないところで守ってくれていたことも、悔しいけど、私一人じゃダメなことも知ってる」

山吹の花を見つめながら淡々と続ける褒？の話を、父はただ黙って聞いていてくれる。そのことに勇気をもらった褒？は、そのまま自分の気持ちを吐露した。

「皆が私を守ろうとしてくれるのは嬉しい。けど、それ以上に怖いの！　怖いのよ……」

褒？には分かっていた。

父たちが皇后問題で行き詰っていたのは本当だろう。

でも、その皇后に選ぶのは自分でなくても良かった。

むしろ危険の高い自分でない方が良かったことも。

両親が全てのリスクを承知した上でこの縁談を進めたことも。

自分を案じてくれる兄のような叔牙（しゅくが）が、それを知って承諾したことも。

だから自分も覚悟を決めて嫁ぐつもりだった。なのに、自分だけ、覚悟が出来ていなかった。

「不安が消えないの。私のせいでこの国に災いが訪れるかもしれない。父様や母様、叔牙を危険に晒して苦しめるかもしれない！　それに、私はいついなくなるか分からない。……私はこれ以上大事な人を作りたくない」

怖いの、褒？は苦しそうにそう呟いて俯いた。

すると、ぎゅっと優しく抱きしめられる。

背中をぽんぽんっと優しく叩く手に、無性に泣きたくなった。まるで本当に幼くなってしまったみたいで、自分が情けなくなってくる。

「久しぶりだね。褒？がそんな風に頼ってくれるのは」

優しいその声に顔を上げると、父が微笑んでいた。

そういえば、ここのところ褒？も夷吾も忙しくて、こうしてゆっくりと話すのは一週間ぶりだった。
久しぶりにちゃんと見る父の顔は、少し痩せていて疲れが隠れ見える。それに気付いた褒？は自分の漏らした弱音を恥じた。

「ごめんなさい……父様たちは頑張ってくれているのに……」
「褒？はいつもそうやって私たちを思い遣ってくれる。だから大丈夫だよ」

にっこりと笑う父を見て、褒？の瞳からぽろりと涙が一粒零れ落ちた。
その涙を見て、夷吾は笑みを深める。

「これから例え何かが起きたとしても、それは褒？だけのせいじゃないよ」
「父様……」
「今回の婚姻は私たちの我が儘だ。だからその責任を褒？が負う必要はない」
「けど、これまで縁談をずっと拒み続けてきたのも私の我が儘です」

褒？はきっぱりとそう言い切った。
父の優しさは嬉しいが、責任を父だけに押し付けるわけにはいかない。

だが、父にはそんな褒？の考えもお見通しだった。だから反論はせずにただ優しく訊ねた。

「そうだね。……褒？は何故今回の縁談を受けたんだい？」
「事情を聞いて……」

「君はそれでも断れた。それは分かっていただろう？」
「……」
言葉に詰まってしまった褒？は、黙ったまま俯いた。
そんな彼女を優しく見守りながら、父は黙って彼女が答えるのを待っている。
すると彼女は少し考えてから口を開いた。
「今まで父様は国の中枢に関わる相手との縁談は持って来なかったでしょう？　なのに、今回は違った。だから、無理を押し通してでも薦めるわけがあるのかなって……」
「興味が出た？」
「うん」
笑って聞いてきた父に素直に頷く。
きっとその“わけ”も自分のためだったのだろう。そう思うと、その“わけ”が知りたいのと同時に何だか興味が湧いてしまったのだ。
褒？の返答に、父はどこか面白そうに笑った。
「褒？は少し私を買い被っているよ。今回のはね、単純に興味があったんだ」
「興味？」
褒？はきょとんとした。
そんな彼女に父は茶目っ気たっぷりにウインクしてみせる。
「君なら陛下とどう接するのだろうかとね。そして、君なら陛下と共にどう歩むのだろうと」

「……それだけ？」
「それだけ。……それに君たちはとてもいい関係になれると思ったんだよ。私と三娘のように」
想定外の答えに上手く反応出来ずにパチパチと瞬く。
その顔が可笑しかったのだろう、父が褒？の鼻を軽く摘んだ。
それで我に返った彼女は父を軽く睨む。
「それはないと思う」
呆れたようにきっぱりと断言してから、目が合った父と声を出して笑い合った。
褒？の中の不安が完全に消えることはない。
けれど、不思議と陛下と会うことが楽しみになっていた。

幕間　結婚前夜（後書き）

1話の回想のその後の話です。

お父さんは妻と娘にはべったべたの甘甘なお方なのですよ。
なので妻も娘も一度も叱られたことはありません。
但し、叱られない代わりに泣かれます。結構ウザいです（笑）

幕間　結婚前夜　――花嫁の両親の場合――

「褒（ほうじ）？は？」
「部屋に戻ったよ」

返事をしながら寝室に入ると長椅子に座っていた三娘（さんじょう）が立ち上がって笑顔で迎えてくれる。それに同じように笑顔で応えながら夷（いご）吾は彼女の肩を引き寄せると、すべらかな頬に口付けを落とした。
嬉しそうに微笑む三娘の肩を抱いたまま、夷吾はさっきまで彼女が座っていた長椅子に共に腰を落とす。

「心配かい？」
「いいえ。私とあなたの娘ですもの、心配なんてしていないわ。ただ……」
「寂しい？」

三娘が言い淀んだ想いを夷吾が代弁した。
すると、困ったように笑った彼女は軽く肩を竦めて彼の問いかけを認める。

そんな彼女を愛しそうに微笑んだ夷吾は、少し俯いてぽつりと本音を漏らした。

「私もだよ」

彼は滅多に弱音を吐かない。
それを知っている三娘は彼の漏らした弱音を聞いて、慰めるように彼のこめかみに口付けた。その意味に気付いた夷吾は三娘を見つめ

て、こっちを見るなというように瞼に口付ける。

「あの子はずっと家に留まってくれると思っていたのに」

言外にあなたのせいですよ、と責められて夷吾は思わず苦笑する。

妻にベタ惚れしている彼は、素直に謝るしかなかった。

「許してくれ……」

それでも睨んでくる妻に、恥も外聞も投げ捨てて夷吾は懇願する。

そのあまりにも情けない顔に、三娘は堪えきれずにクスクスと笑い声を漏らした。

「許します」

その答えを聞いて夷吾はほっと安堵した。

「分かっているわ。それに婚姻が決まらなかったら、きっとあの子はもっと遠くへ行ってしまったもの」

「ああ、旅に出ることを考えていたようだからな」

褒？は気付かれていないと思っていたようだったが、夷吾も三娘も彼女が家を出ようとしていたことに勘付いていた。

彼女はこっそりと街で仕事をして旅費を溜めたり、馴染みの商人に旅の話を詳しく聞いたりして旅の準備をしていたのだ。

それに気付いた父は内心でかなり慌て、どうすれば彼女を引き止められるのかを必死で考えた。

結局、博打のような縁談話を持ち込んでの賭けに出るしかなかったのは我ながら情けなかったが、引き止めるのには成功したのは幸い

だった。
ただし、方法が方法だけに夷吾としてはかなり複雑な面持ちだったが――。
「あんな子供に嫁がせることになるなんて……」
「あら、顔はいいわよ？　案外お似合いなんじゃないかしら」
夷吾が苦く零したその愚痴に、ころころと三娘が笑う。
彼女に婿の肩を持たれて、夷吾はこの世の終わりのような顔をして吐き捨てる。
「止めてくれ」
「あなただって陛下のことは認めているじゃない」
「それとこれとは別だ」
憮然とした顔で拗ねる夷吾という珍しい彼を見た三娘は声を上げて笑った。
妻のその態度に、夷吾は苦虫を噛み潰したような顔をする。
「あなたよりも陛下の方が偉いものね。文句が言えないから拗ねているのでしょう？」
「そんなことは――」
「あるでしょう？」
夷吾が否定しようとした言葉を遮って、三娘はそんな風に聞いた。
訊ねる口調ではあったが、明らかに自分の言葉が正しいと確信している。
にっこりと笑って見つめてくる彼女に、夷吾はため息をつきつつ白旗を上げた。

「私たちは変わらないわ。今まで通りあの子を見守っていればいいのよ」
「そうだな」
言い聞かせるような口調の三娘に苦笑を返しながら答えた。
仕方がない。
もう自分たちに出来ることはそれ位だけなのだから――。

幕間　結婚前夜　――花嫁の両親の場合――（後書き）

短いですが両親編。

この後、父は治まりきらない娘を奪われる不満と寂しさを思いっきり曝け出し、朝まで母に慰めてもらうのでした。

母は最後まで笑って聞いていたそうです。

ある意味ちょっと恐ろしい（笑）

新たな襲撃者

あれから怪我人などを下がらせ、すぐに隊列を組み直して出立した参詣行列は、その後、特に何かの異常事態に見舞われることなく、民衆の歓声が響く中、無事に橙道の北部を抜けた。

今は大通りの交差する中央広場を左に折れ、涼宗道を東に向かって進んでいた。

この辺りは大宗廟に近づくにつれて店や家がなくなり、その代わりに大宗廟に仕える神官の住居や兵士たちの鍛錬場、駐屯地などがある。高い建物が少なくなり、平地が増えるこの場所は公然と襲うにはもってこいの場所だった。

軍の精鋭部隊である近衛隊だが、さすがに数で押されれば隙が出来る。そこを狙われた歴史(かこ)に倣(なら)い、数による奇襲を防ぐためにこの場所は要警戒区域とされていた。

そのため、参詣行列の際にはこの付近には警備の兵以外の人間は近寄らない。もしそこをうろつき、兵に見つかれば、問答無用で不審者としてひっ捕らえられてしまう。公布(ふれ)がなくてもそれを知っている国民や見物人は、今日一日そこには近寄らないのだ。

「何だかそれって所謂(いわゆる)チャレンジコースよね……」

「？　ちゃれんじこぉす？」

この辺りに兵士以外の人がいないことを不審に思い、それを辟方に尋ねた褒(ほうじ)?は、説明を聞いて思わずぼそりと呟いていた。
聞き慣れない言葉を聞き咎めた辟方(へきほう)が問うてくるのを、顔を顰(しか)めた褒?は首を振って「なんでもない」と返す。

褒?はただ、突然起こった異常事態から逃れたかっただけだった。
だからこそ、辟方の気を別のものに逸らそうとして軽く訊ねたのだが、何故そんな結論に達したんだと呆れて思わずあちらの言葉を使ってしまっていた。

だが、それでよしと諦めるような性格ではない辟方は、答えを求めてじっと褒?を見つめてくる。
それに早々に白旗を揚げた褒?は内心半泣きになりながら答える。

「ああ、いや、まぁ、要するに、自信のある者だけが仕掛けてくる挑戦の場のようになっているなぁ、と思ってさ」

褒?は視線を泳がせながら答えた。そんな様子では不審極まりないのだが、今の辟方とは目を合わせたくない。のだが、流石に自分でも怪しすぎて冷や汗が出てくる。
是が非でも目線を合わせたくない褒?の気持ちに気付いたのか、それとも顔から噴き出している大量の汗を見て哀れんだのか、辟方はそれ以上追求してくることはなかった。

「考えようによってはそうかもしれんな」

褒?に追従した辟方は、ふっと軽く笑った。
その瞳が優しく褒?を眺めていて、いたたまれなくなる。

先ほどの襲撃の後、大輿に戻る時からそうだった。

あの時繋がれた手は、未だに繋いだままである。

輿に戻ったら離すのかと思っていたのだが、一向に離さない。それならばと自分から手を離そうとすれば、その手をぎゅっと握られて離せなかった。

それだけならまだしも、何故か辟方はそれから頻(しき)りに褒?をじっと見つめてきた。

沈黙の中、ただただ見つめられるのは居心地が悪くて、何度も「何か用?」「顔に何かついてる?」と訊ねては、「いや、お前の顔を見ていたかっただけだ」と笑って返されて困惑していた。

それ以前は、どちらかというと褒?に対してツンケンしていた、というか怒ってばかりだったのに突然態度が１８０度以上豹変して、正直、褒?は辟方とどう相対すれば良いのか分からなくなってしまっていた。

今だってちらっと辟方の顔を見上げると、こちらを見ていたらしい彼と目が合ってにっこりと嬉しそうに微笑まれる。

彼のこの豹変に、訳が分からず焦燥と混乱の果てに恐怖を感じるほどだ。

辟方が何をしたいのかよく分からない。

この沈黙が辛い。

視線が怖い。
居心地悪い。
次第に手がじっとりと汗ばんでくる。
それがさらに気持ち悪さを加速させていく。

ただ手を繋いで見つめられているだけなのに、褒？は追い詰められていた。
俯いて辟方の姿を視界に入れないようにし、必死に動揺を押し殺す。
辟方の存在に気を乱され、気を取られて、常にしていた周囲への警戒が散漫になっていた。
そのことに気付かないほどに。

だから、気付かなかった。
それは致命的な隙だった。

土を蹴る足音と、空気を切る鋭い音に気付いて顔を上げた時には、褒？たちの目前に三本の短剣が迫っていた。
褒？は咄嗟に一歩前に出ると左腕を掲げてその腕で短剣を受け止める。

「っつ！！　一つ外した」

褒？の左腕には布を何重にも巻いてあり、その間に小さい鉄片を仕込んでいた。その鉄片で短剣を三本とも受け止めるはずが、一本だ

け鉄片のないところに刺さった。
周囲を見回して、他に飛来物がないのを確認してから、警戒しつつ刺さった短剣を引き抜く。腕まで達していたために、刃先に血が付いているのが見える。
その血を見て顔色を変えた辟方が、
「大丈夫か？！」
と慌てて短剣の刺さった腕を覗き込んできた。
そんな辟方を無視して細長い布を懐から取り出すと、袖をまくって刺さった部位よりも心臓に近い肘の下辺りをきつく縛る。
その間にも大輿の前方から全身黒尽くめの怪しい集団が押し寄せてきた。
「何あれ……」
褒？の気が思わず緩む。
それもそのはず、新たな襲撃者たちは剣を持ってはいるものの、身体の線が見えるようなぴっちりとした、まるで全身タイツのような服装をしていた。
それが集団で押し寄せる間抜けな光景に予期せず力が抜けていく。
思わず、
（これで私好みの素敵筋肉（ないすまっちょ）がいれば盛り上がるんだけどな）
などと考えてしまう。

すると、無視していた辟方が痺れを切らしたのか腕を掴んで覗き込んできた。

「おい！　大丈夫なのか？」

「え？　あ、うん」

すっかり辟方の存在を忘れて襲撃者の格好に見入っていた褒？は気の抜けた返事を漏らす。

「……本当か？　戦闘になっているのにそんな気の抜けた様子なのはどこかおかしくないか？」

言いながら辟方は褒？の左手の袖をまくって、そこに布が幾重にも巻かれているのに驚いている。だがすぐに我に返ると、その布を強引にずらしてめくり、腕の傷を見て顔を顰めた。

「血が、出てる」

傷口に触れようと伸ばした手を、しかし触れる手前で止める。

辟方は懐から手巾を取り出すとそれを傷の上から丁寧に巻きつけた。

「毒は？」

「短刀の刃は腐食してないから危険なものは塗られてないよ。身体に異常もないし」

「そうか……」

手巾のはしとはしをきゅっと結ぶと、今度は巻いた手巾の上から傷口にそっと触れる。

ピリッと傷が痛んだが、大したことはなかったので褒？は辟方の手をそのままにしておいた。

「それで、何でそんなに気が抜けたんだ？」
「だって、ねぇ……」
褒？は辟方の方を向きながら、チラッと前方の戦闘区域を見やる。
そこでは既に襲撃者と近衛隊との戦闘が始まっていた。
その中に襲撃者の一人が兵士に襲い掛かり、剣を振り上げているのが見える。襲撃者の衣服は上下で分かれているらしく、彼らが手を上げて振りかぶるとその度に見えるのだ。

へそが。

怪しい黒尽くめの男たちのへそちら？が見えても全く嬉しくない。
それどころかげんなりしてくる。

「あ！　そうか」
「どうした？」
「これは精神攻撃よ！」
「は？」
「うん。そうとしか考えられない。なるほど。なるほど」
褒？が一人で納得してうんうん頷いていると、額に手が触れた。
「熱は」
「ないです。失礼ですね」
辟方の言葉の機先を制して褒？が怒る。
どうやら彼らのへそちらが気になるのは褒？だけのようだ。
戦闘している兵士たちも全く気にせずに戦っているのが良い証拠で

ある。

「むむむ。おかしいな……。逆に聞きたいわ。なんで気にならないのよ」

褒？は呟きながら袖下から鉄扇を取り出した。

それを見て辟方が眉を寄せる。

「それを出してどうするつもりだ？」

「どうって、加勢行くつもりだけど？」

何でそんな当たり前のことを聞いてくるか分からず、首を傾げると辟方の顔が険しくなる。

何故辟方が突然怒り出したのかさっぱり分からない褒？は更に首を傾げた。

「何？」

黙ってこちらを睨みつけながら、怒りの空気を発している辟方に褒？が率直に尋ねると、更に怒りによる威圧感が増す。

どうにか自分が怒らせていることは分かるのだが、何に対して怒っているのかが全く分からない。

そうこうしてる内にも戦いは激しさを増していた。

仕方なく、訳を聞くのは諦めて、褒？は大輿から飛び降りようと駆け出した。

しかし、そんな褒？の腕を、辟方が掴んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7795w/

条件付きの結婚生活

2011年12月24日02時54分発行